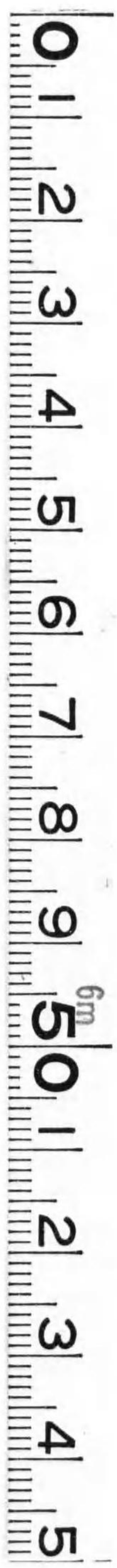


550

574

三世一身無所不遍  
八千度馬服隨胎又釋迦  
下上人各持地方之形半子去注意  
小所神子休之此便是羅刹的：休  
江蘇集  
此物度乃之無誤

12



始





八好

在卷

張每

大正  
15. 10. 11  
内交

八軒長屋續編

破れ衣に網代の笠を面深く載いて市中に鐵鉢を捧げ廻る乞食坊主の宗立と、尻切神天に繩襪の草鞋履、これで昔の手取山とは情ない身の果の立坊、わざと身を職工に落して勞働者一般のため大に爲すところあらんと古洋服の高足駄を踏んで氣焔萬丈の井上進、昔から相變らぬ蚊の脛を飛ばして的もない他人の家庫地面を追ひ廻る千三屋の石作、この四人は朝の六時ごろより前後ぞろぞろと長屋を立出で、また夕暮よりは宵闇の化物二疋、破三味線を抱へて狼の遠吠に似たる贅六太夫と、さても久しい神易の弓張提灯を携へながら、悄然として罷り出る八卦よい屋の朝鮮髻、そのまゝ晝も夜も自己が塙に居坐りて動かぬ奴は、串削りの半助老爺とマツチの函を張る瘡毒お六、以上いづれも満足に三度の食事は續かねど、皆それく人間相應の職を求めて餓死も

せぬ中に唯一人、生殖機能の講釋ばかりでは飯の種にならぬ色情學者の富田剛太郎、

人知れぬ腕を組んで眉を顰めながら何をか頼りに考へ出しぬ、

實は此奴この長屋へ落ち込む時、二三軒の下宿屋を踏み倒し手の届くだけ朋友を欺し

ぬいて、得たる用意金二十三圓あまり、これを籠城の兵糧として今日まで凌ぎ來りし

が、もはや澄まし込んで懐手のまゝ外の奴等を冷笑しても居られず、うかく隣屋の

托鉢坊主と喧嘩も出來ぬ場合、苦し紛れの一策を案じ出して、さのみ平生は親しく言

葉も交さぬ入口の朝鮮髻を差覗きぬ、

「八卦屋さん、お一人かね、なるほど晝夜交代で、例の石作君は晝間、貴公は夜の番

だな」

「や、色情の先生、どうですか、近ごろ何か面白い變つた事は、ありませんかね、だが

蜂や蛆虫の講釋は御免を蒙りますませ、まだこれでも人間の部に這入ッてる覺悟です

からな」

「は、なアに全體、ありやア直接、さういふ理由でない、所謂人を見て法を説

けの筆法で、つまり君等の頭腦へ解し易く入り易い比喩を引いて見たのさ、は、

は、時に八卦屋さん、突然、妙な事を聞くやうだが、夜の淺草は却ッて晝間より

人出が多からうね、君が神易で毎夜、どのくらゐの見料が取れる」

「さやうさね、こゝ一二年の前までは随分、時に不意の収入もありましたがね、どう

も近來は人の氣が段々と横着になつて、そもゝ人間この運命といふ恐ろしいもの

を何とも心得ないから困る、歎かはいしい理由さ、たゞ素通りの歩の早い奴ばかりで

ね、まづ百人のうち五六人の割合ですな」

「ふむ、なか／＼繁昌するね、織るが如き淺草の雑踏で、素通りの百人に對して五

六人とすれば、決して歎かはいしく無からう、妙からん収入だ、それに貴公、いつも

何故さう顔色憔悴としてるんだ、ふしぎだね」

「いや、割合が違つてる、素通り百人の五六人ぢやアない、正しく拙者の前面に歩を止めた百人中の五六人さ」

「は、は、さうか、ぢやア貴公の前面に毎夜、どのくらゐ人の山を築くね」

「まづ宵の六時ごろから十二時までとして、總計四、五十人でせうな」

「四五十人、それぢやア、どういふ割合になるんだ」

「百人に五六人ですから、實際の四五十人に對して、せいぐ二人か、二人半ぐらゐに當るでせう」

「半とは變だね」

「半とは、物の兩分なり、五錢の見料を二錢置いて行く奴がある、これ即ち錢の半で、二人のうち一人が冷かし客で、さんざ拙者に饒舌らして其まゝ遁け出す奴、これを

先の一人に割り戻せば人間の半が出るでせう」

「は、は、は、いかに貴公は面白い、貧乏しても暢氣に出来てるよ」

「これで心配があつて病氣が出りやア、この世に生きて居ませんよ、は、は、は」

見向もせぬ足早の素通り百人に對して五六人の割合、實は拙者の前面に立つもの宵の六時より十二時までの四五十人に對して二人か二人半とは、これで此奴まだ掛價の神易、嘘のないところは一夜に一人あるか無しかの八卦よい屋、うかくすれば弓張提灯の蠟燭代も得とらず、すごく夜風に泣きッ面を吹かれて歸る事もあれど、さりとして半日の依頼にもならぬ石作との相住居、寢て居て鑑一文の的もなければ、やはり外に藝のない算木筮竹の乾坤を抱へながら、ふわくと人魂の如く淺草の宵闇へ迷ひ出でぬ、

山門の片邊、濡佛の横合、共同便所の前、あ、我ながら久しくなりぬ朝鮮髻、他の運より自分の運命こゝに動かず根が生えて、徒らに算木を置き變ふる音のみ、かちくと高く、空しく笹竹を掻き鳴らす音のみ、ざら／＼と聞えて、さらぬも空腹より絞りに出す黄色の聲を振立てつゝ、饒舌れども嘔れども悲しや一人の客もなし、煤けたる弓張提灯の餘光、ほつとして届かねど、折しも二間あまりの彼方に立止りし人影、こいつ遁してなるものかと、俄に木像の如く威儀を正せば、その人影また次第に近寄る足音、ありがたい、占めたと一段の調子を張り上げながら、加之も狼狽へて平生の口に馴れたる易の講釋より、まづ第一の氣にかゝる見料を喚き立てぬ、

「今夜は則ち拙者の亡父三回忌に當るため、平生は十錢のところを僅五錢の見料で宜しい、またと後日ない事、これだけでも諸君方の運に叶うた一端ぢや、さアこの運の去らぬうちに生涯の吉凶判断、如何ですな」

饒舌りながら我前に立寄りし客を見れば、同じ長屋の色情學者、例の富田剛太郎なり、

「八卦屋さん、うまいね」

朝鮮髻、おもはず瘦せツ面を皺めて、蟋蟀よりも音高き舌鼓

「ば、馬鹿々々しい、怪我がないうちに、そろ／＼歸らう、今夜アとても無効だ」

「しかし亡父の三回忌は實に奇想天外だツたよ、は、は、は」

「ふざけずに置いて貰ひたい、わざ／＼何も洒落や酔狂で長の歲月、かうしてる理由ぢやア無いからね」

「いや、さう怒られては甚だ困る、實は今朝、ちよいと貴公に聞いた事があるだらう、淺草の夜の景況を、それに就いて僕も今夜、急に出かけて來たのさ、無論、たゞ散歩ぢやアない、聊か考ふるところあツてだ、ついでに貴公どこに居るか、さんざ探し歩いたよ」

「いやでも應でも毎日、同じ長屋で絶えず顔を見合せて居ながら、わざわざこの淺草で探し歩くに及ばないこつた、何か知らないが自分は自分の事だけ、聊かでも多くでも勝手に考へるが宜い、まづ拙者は今夜これで歸らう」

實は宵より饒舌りぬいて五厘銅貨一枚も手に入らぬ八卦よい屋、苦し紛れに叫びし亡父の三回忌を我ながら名案と思ひの外、同じ長屋の奴に奇想天外と冷かされし癩癩まぎれ、俄に天地乾坤を小脇へ挿んで後も見返らず立去りぬ、

田舎漢が目を剝いて驚きながら、米の高くなる筈、これだけの生きた人間が居るかとか叫びし淺草の仲店も、夜の繁華は山門までの雑踏、その山門を入れれば俄に薄闇き本堂の此方を幸ひ、さりとして人の往來に離れず敷石の右側に立ちて、調子外れの怪しげなる聲を張り上げしは例の色情學者、今夜こゝに初陣の富田剛太郎なり、

踏み倒した下宿屋と借り倒した朋友の外、どこに曝しても人に知られず恥辱にはならぬ面ながら、本人これでも大に他日を慮る心體、星明りの薄闇に古帽子の鐙を下して半面を隠し、わざと身を斜めに構へ片手は腰の兵兒帯に差込み片手は的もない宙に浮かしぬ、

「諸君、あゝ諸君よ、往來の諸君、そもく我輩は、諸君、諸君、あゝ諸君よ」

しきりに闇の中より諸君々と叫ぶ聲、さては狂氣の演説が始まったと三人五人、無價なら廉いと七人八人、果は二三十人、次第に人の山を築いて、ぐるりと取巻けば、富田剛太郎、こゝぞと一入さらに高く叫びぬ、

「諸君、そもく我輩こゝに何のため來ましたか、また我輩の口から今こゝで何を演じますか、大に考へて貰ひたい」

いくら考へても貴様の事は分らんぞ、自分で勝手に饒舌れと、わいゝ四方八方より

冷かされて、俄に狼狽へ出しぬ、

「いや、諸君に考へてくれとは言はん、我輩が考へて我輩の口から、なるほど、こりやア失敬、つまり我輩が大に考へなければならん理由ですな、よろしい、そこで諸君、そも／＼我輩は大に考へましたよ」

何を考へた、早く饒舌れと笑はれて、ます／＼面くらひぬ、

「饒舌るぞ諸君、もはや進退こゝに谷ツた理由でも無いが、大に饒舌らざるを得ない我輩である、そも／＼我輩は天地間に於ける生物中の最高等、この人類自然の避くべからざる要求に應じて、その事實を遂行しつゝある生殖機能の研究者である、つまり、男女両性の交接中より吾人々類の後継者と社會複雑の罪惡とを産み出す外、さらに最も進歩發達した文化向上に伴うて新なる人道の本分本能を産み出すとする我輩である、これに就いて我輩が多年研究の結果、なほ具さに委しく面白く先人

未發の名論卓説を喋々と演じたいが、どういふもんか我輩、ふしぎに今夜は不可ない、實は我輩こゝに出たのが始めてだよ諸君、察してくれ給へ、あゝ諸君、買ツてくれ玉へ、讀んでくれ給へ、この懷中に我輩の大脳を傾けた著作物がある、しかし諸君、哀れなる哉、破天荒の立論學説に力はありあまつても、悲しい哉、これを活版屋に命すべき資力が無い、そこで我輩、己むを得ず、いろ／＼鉛筆で自から書いた男女交接論が五冊、一冊が改良半紙七枚半づつで代價二十五錢、もし幸ひに今夜これを諸君に賣切れれば、奮勵一番さらに明日の夜は十二三冊を書いて来て、連夜連賣の好結果、竟に數十萬部を印刷し數百萬部を刊行し、以て大に社會人道のため盡さんとする我輩である、いかにすれば人間この色慾なるものを遺憾なき正當の道に行へるか、どうすれば今日この色慾を人類發達の理性的に渾然として同化せしめ得らるか、男女交接の本能と作用とを最も適切に最も簡易に最も自然に保護し獎勵し



指導して、人事一切の歸納するところを他に求めず、個々に有する生殖機能の一局より實行的の道徳を出さんとする我輩である、その名論卓説が僅二十五錢とは實に諸君、あゝ諸君」

一蓮托生の長屋では誰に恐れず憚らず、滔々として饒舌る奴なれど、今夜こゝに始めて初陣の眞向を見物に冷かされ、加之も二十五錢が欲しさの一念に狼狽へて、前後めちやくくに我輩と諸君を振廻しながら、頻りに駄辯を弄する後より、ぬツと不意に手首を掴まれぬ、

「ちよいと警察まで来い」

「えツ、警察」

「風俗壊亂だ」

今夜また相變らず山門の片邊り濡佛と共同便所の間に陣を構へて、ほしやく鬚を捻りながら算木筮竹を置き並べし八卦よい屋、うす闇き弓張提灯の影より瘦せツ面の額越に目を光らして頻りに往來の足音を窺ふ折しも、どやくと此方へ寄せ来る人浪、はて不思議と思へば、不意に横合より肩口を掴み上げられぬ、

「おい、この男を知ッてるか」

はツと驚いて振り返れば、四年越の淺草に見覚えの角袖巡查、

「は、どれで御坐います、どの男で御坐います」

「これだ、この男だ」

密行巡查に押し出されし面を見れば、どうした理由か知らねど色情學者の富田剛太郎、わざと頻りに肩を怒らしながら、もはや遁れぬ自棄半分、四邊の見物に聞けがしの氣焰萬丈、

「やア八卦屋さん、兎も角も貴公きこうで證人しょうにんになつてくれ、業平町の八軒長屋に住居する富田剛太郎とんだがうたろうといふ事を、公明正大こうめいせいだい、別に疚やましいところは無いが、つまらなく一夜はなでも浮浪罪うらうざいに處せられちやア學者の面目めんもく、癩しかに觸るよ、その外の事に就ついては既に僕の胸中きょうちゆう、寧ろ進すすんで警察へ行くだけの覺悟かくごはあるんだ、苟いさしくも人類向上じんるうかうじやうの進化發達はつたつに伴ともうて自然しぜんの本能ほんのうより産み出した僕の説せつを、卑猥陋劣ひわいろうれつなる風俗壞亂ふうそくわいろんに當て箝はめるとは、けしからん事だ、これを幸さいひ他日たじつのため、大に僕は警察で議論する決心けつしんだ、もし間違まちがへば僕の天賦てんぷと權利けんりと自信じしんのあらんかぎり、さらに正式せいしきの裁判さいはんを受けて法廷はふていに争あらそふ決心だ、貴公きこうに迷惑めいわくは及およぼさんから唯一たぎ一言いごんちよいと證明しょうめいしてくれ、ねエ八卦屋さん、貴公きこうと僕ぼくとは同じ長屋でも特別とくべつの深い交誼なかつで、殆ど兄弟きやうだいの如ごとくにしてるだらう」

さらぬも臆病おくびやうの八卦はちよい屋、俄にわかに青あせくなりて兩手りやうてを宙ちゆうに打ち振りぬ、

「じよ、じよ、戯談じやうたんも時ときと場合ばあひに依よりけりだ、そんな事を言いつてくれちや困こまる、何が特別とくべつの深い交誼なかつなもんかね、兄弟きやうだいの如ごとくしてるのは石作いしやくだよ」

「や、貴公きこう、多年たねんの懇親こんしんを忘わすれて、急に薄情はくじやうな事を言いひ出すね」

「多年たねんの懇親こんしん、困こまるよ、さういふ卷添まきそを喰くつちやア、兎も角も拙者せつしやこれで御免ごめんを蒙かうじらう」

「ぢやア同じ長屋ながやに住すでるといふ事も證言しょうげんしないんだな」

「金の證文しょうもんに何時なんどきでも判はんは捺おすが、警察向けいさつむきの證人しょうにんは甚はなだ好このまないから、どうか此このまゝ見遁みのがして貰もらひたい」

見物けんぶつおもはず手を拍うつて、どつと一時じに笑わらへば、朝鮮髯てうせんひげますく、狼狽ろうたへて算木筵竹さんぎせいちくを取片とりかた付けながら、はや遁仕度にひじたくの體ていに、巡查じゆんさも我われを忘わすれて吹ふき出しぬ、

「はゝゝ、別に心配しんぱいしなくつても宜いい、この男をとこが幸さいひ汝おまへと親したしい間柄あひだがらだといふから聞き

いて見たんだ、つまり汝と同じ長屋に居る事は居るんだな、一三年來こゝを動かさない古顔の汝は本職が能く承知してるから、この男の住所姓名に就いて取調の手数を省く理由だ」

「いや、決して拙者、その男と親しい間柄では御坐いません、どツちかと申せば平生、あまり交誼の善くない方で」

「わかつてる、わかつてるが同じ長屋で富田剛太郎といふもんに相違ないな」

「さ、その邊を何と申して宜しいか、甚だ困ります理由で」

「よし、ぢやアそれで宜い」

富田剛太郎、密行巡査に引かれながら、目を剥き出して後を振り返りぬ、

「朝鮮髻、覚えて居ろ、あゝ同情の諸君よ諸君、その八卦屋は多年の利害休戚を共にする同じ長屋の僕に對して今この場合、たゞ一言の證明すらしてくれない奴です、

實に江戸ツ子的の精華を以て成り立つ淺草の境内へは、一晩も無事に置けない奴でせう」

後に残りし見物、誰が手を出したともなく足を出したともなく、あはれや四方より朝鮮髻を取巻いて、わいゝゝ喚きながら面白半分に押倒せば、八卦よい屋おもはず一生懸命の悲鳴を振立てぬ、

「たゝ助けてくれッ」

夜の十時過ぎ、二本の算木と四五本の筮竹を左右の兩手に握りながら、神易の弓張提灯も捨て、乾坤轉倒の中より生命からゝ遁け歸つたる朝鮮髻、あはれや半泣きの聲なり、

「石作さん、石作さん」

同じ哀れの此奴も相變らす的のない一日を駆け歩いて、やうく今こゝに身を横へしが、俄の聲に驚いて跳ね起きぬ、

「な、何だよ、慌て、何だよ」

「さ、残念だ、拙者この年まで、こんな酷い目に逢った事アないよ石作さん、君も覚えてるだらう、舊こゝに居った破戸書生の吉川に一夜の見料を取られた時よりも、却って残念だ、腹が立って堪らない、事の原因は畜生あの杵白野郎だ、どうしても此まゝには濟まされぬ、長屋中に談判して、あの野郎を叩き出さずに置けないんだ」「まア落着いて話すが宜い、あの杵白、どうしたんだよ」

「どうして石作さん、かうだよ、過日、だしぬけに彼奴、淺草の景況を聞くからね、はて變だと思つて居たのさ、すると杵白、例の色慾を淺草の本堂前へ荷ぎ出して大道演説を遣つたらしいんだ、ね、ところで野郎、すぐ風俗掛りの密行に捕まつたは

宜いが、けしからん奴だよ、餘計な事を吐してね、こゝに出てる八卦屋が兄弟だとか、いや親類だとか、とんでもない卷添を喰はさうとするから驚いたよ、拙者これぞ一身の大事と心得て、なかく承知しない、全體また外の事と違つて、苟くも警察沙汰を石作さん、親でも子でも無い奴に對して、うかく承知が出来るかね、すると野郎、外貌によらない性質の悪い捨鉢な奴だぜ、引かれ際に後を振返つて、いかにも拙者が薄情なやうに不埒千萬な毒口を聞きやアがったんだ、それが石作さん、白晝なら兎も角、夜の淺草名物で尻尾のない彌次馬が、うんと押合つて出盛りの眞ツ最中だから堪らない、理も非もなく一時に四方より拙者一人を取巻いてね、わい、面白半分に騒がれた結局の果、多年の神易を現はした提灯は破られる、頭から砂をぶつかける奴がある、後から引倒される前へ突き飛ばされる、いやはや災難も災難、こゝに始めて生涯の大難に出ツ喰はしたよ、しかし石作さん、その騒動の

中で算木二本と筮竹五本を我知らず左右の兩手に握ッて歸ッたところは、實に勇士の戰場ともいふべき拙者だぜ、然るに畜生この拙者を杵臼の分際として、かういふ酷い目に逢はす奴を無事に置けるかね、どうしても長屋中の協議上、叩き出すべき奴だよ、それには幸ひ托鉢の宗立坊、ありやア時に取ッて拙者の味方だ、まづ第一これに相談する心算さ、石作さん、ともぐく口を添へて貰ひたい、平生と違ッて、いくら意地の悪い贅六も、まさか嫌とはいふまい、その他の手取山も瘡毒女も隣屋の洋服も、文句のない筈だ、ねエ石作さん、さういふ筈の理由ぢやアないか」

「なるほど、そりやアさうだ、さう聞いた以上、この石作も承知の出来ない場合だ、口を添へるところか腕を揃へて畜生、どこまでも彼奴を叩き出さう、こゝが互に古い馴染だよ、かういふ時こそ人一倍の力になるんだぜ」

「や、頼もしいね、だから拙者、巡查の前でも君の事を言ッたよ、眞實、長屋中で兄

弟のやうにしてるのは石作といふ男一人だと」

「有難い、何より隔意の無い證據だ、そんな場合にも僕の事を言ッてくれたか、猶更ら以て杵臼野郎、捨て、置けない理由だ」

「どうしても石作さん、君と拙者は、一方ならん深い縁だな」

いかにも此奴等、よくく離れ難い前世よりの約束、一方ならん底の深い動きの取れぬ貧乏因果の寄合なり。

操り人形の餓鬼舞踊に等しく飛び跳ねながら、いよ／＼杵臼野郎を叩き出さずば承知せぬといふ八卦よい屋の勢ひに石作の助太刀、まづ第一に雙手を舉げての賛成は托鉢の宗立坊、立ん坊の手取山と串削りの半助老爺とマツチ函を張る瘡毒お六は、兎も角も長屋中の古顔に對して文句なけれど、壁一重の隣屋に寢ても起きても古洋服の井上進と例の贅六太夫は、さて急に諾といはぬ奴、聊か小首を捻り出しぬ、

わけて贅六は四邊かまはぬ高調子、

「全體、こんな事は一方の片言ばかりで極められまへんぜ、なるほど八卦屋はんに嘘は無からう、現に自分の商賣道具を失うて来た上、見れば頭に二つ三つ瘤の出来るのが何よりの證據ぢや、さぞ痛からうわい、しかし不思議な事には、その瘦せた骨ばかりの身體で折れもせず凹みもせず、ようまア餘計な肉が持ち上ったもンぢやな、はゝゝゝ」

きくや否、もはや長屋中の半分以上を我味方と頼みし朝鮮髻、ますく躍起となりて喚き出しぬ、

「おいゝゝ贅六さん、平常とは違つてるよ、例の調子で變に呵しく、ふざけて貰つちやア困るよ、かりそめにも拙者の身に取つて生涯の一大事、容易ならん恥辱に逢つたんだ、もし舊の馴染が揃つて居りやア前夜のうちに一も二もなく埒の明く事を、

近來ア新來の人が多からね、わざと今朝まで遠慮して居たんだ、第一また瘦せても枯れても生きてる以上、ふしぎでも無く瘤の一つや二つは吹き出すもんだ、石佛ぢやアなし、擲られて痛くない奴があるかい、さア八軒の長屋で人間の数が九人、その中で相手と拙者を除いて七人の評議だ、ぐづぐづと文句は入らない、杵臼を叩き出す方が多いか少いか、まづ其事を聞かう」

背後より助太刀の石作、此奴また麥藁細工の笛に似たる聲を張り上げぬ、

「なアに、わざく聞くに及ばないよ、七人の中で第一この石作と宗立さんに異存のないは知れたこつた、また手取山も今でこそ昔は大した關取だ、いはずとも男氣はあるさ、その隣屋の瘡、いや、お六さんも無論、優しい女のこつたから多分に漏れる筈が無いとして、此方側では半助さん、こりやアもとより生粹の江戸ツ子だ、ね、すると以上五人に對して二人の贅六さんと古洋服の目鏡さんは、是非とも引ッ

込で貫はないと、頭數の勘定が合はんよ」  
 井上進といふ名を持ちながら、古洋服の目鏡さんといはれし一言、ぐつと猶更ら癩に  
 觸りて、下手な畫工の閻魔に等しく、茫々たる髯の中より面半分の大口を開きぬ、  
 「おい、貴様ア魚屋の小僧だったか知らないが、物事は鱈のやうに頭數の勘定で濟ま  
 ンぞ、加之も外の人間ばかりに名があつて、この僕一人に名が無いと思つてるんだ  
 な、古洋服の目鏡さんとは何だ、いくら洋服は古くつても頭腦は世の中の進歩に伴  
 つて時々刻々に新しいぞ、また目鏡の有無に關せず別に先見の明なるものがあつて、  
 今日こんにちの勞働者らうどうしやは他日たじついかなる社會しやくわいの一大勢力たいせいりきよくになるか、それがため、わざと身を職  
 工こうに落して實地の經驗けいけんじやう上より大に爲すところあらんとする井上進だ、何事なにごとによらず  
 醉生夢死すいせいむじの貴様等きさまらが多數決たすうけつに制せられて堪るもんか、つまり今いまあの上かみかた方人間じやうじんの説だ、  
 一方ひうの相手あひてが警察けいさつから歸つて來た上うへで徐ろおそに議すべきこつた、それも本人ほんじんが動かな

いといへば、みだりに他より住居の權を犯す事ことア出來ないぞ」  
 さらにぬも首を伸ばして耳を傾けし贅六、待ち兼ねて躍り出しぬ、  
 「やア井上はン、いかにも貴君あなたのいふ通りぢや、以來お心易こころやすう願ひますぜ、どうも此  
 長屋ながやは没理漢わふりぢやが多うて困るわい」  
 世の中より見れば、あつて用なきのみが、實は死場所のない人間の屑くづの寄合よりあひながら、  
 その屑には屑相應くづさうおうの長屋問題ながやもんだいを惹起ひきおこして、あの杵臼野郎きねうすやを叩き出すか、この八卦はちけよい  
 屋やが出るかの大騒動おほさわうどう、いよく天下分目てんかわけめの戰鬪たかひとなりぬ、  
 自己おのれに損さへなくば、たとひ一文の利にならずとも、無價ただで面白半分おもしろはんぶんに事ことあれかしの  
 贅六ぜいりく太夫たいふ、幸さいひ屁理窟へりくつを捏こね廻ます古洋服ふるやうふくの化物はけものを唯一ゆゑの味方みかたとして、あくまで意地いぢわ  
 るく反旗はんきを翻ひるがし、また八卦はちけよい屋やは我身わがみの存亡興廢そんはうこうはい、何事なにごとにも進退しんたいを共にする例れいの石  
 作さくを參謀さんぼうとし、さす敵てきの杵臼きねうすと犬猿けんゑんに等しい托鉢坊主たくはつぼうずを味方みかたとして、負けず劣おとらず雙さう

方より空腹を抱へながら喚き出す形勢に、その他の一蓮托生いづれも聲を潜めて局外中立の態度を取りぬ、

今朝より引續いての喧嘩腰、古洋服の井上進は今日は會社を休んで、わざと一日の日給を空にしながら贅六の塙に坐り込みつゝ、目鏡越の髯ツ面に泡を吹いての大氣焔、「あの八卦屋、實は取るに足らない不生産的の小動物だから、うよくくと蟲の如く只無意味に蠢いて居れば兎も角、動もすれば彼奴、みだりに露店の骨董物と一般、この長屋の古顔を振り廻して、をりく〜他に對する舉動言語の面白からん奴だよ、第一また歲月の長短と出入の新舊を以て事に處するが如きは、最も不自然を極めた舊思想の悪習慣で、この井上進が今日、わざと身を職工に落して、労働社會のため他日の一大原動力たらんとする深意また茲にありだから、多年の主義としても此際あの八卦屋を無事に置けない、たとひ一方の色情學者に如何なる缺點があるにせよ、

そりやア別問題だ、既に警察へ引かれた以上、我々の關するところでない、寧ろ現在この長屋の安寧秩序を紊さんとする八卦よい屋、宜しく彼奴を放逐すべしだ」贅六、おもはず膝を進めて頻りに感ぜし體ながら、元來これが此奴の性質、何とやら人を馬鹿にした調子のある奴なり、

「なるほど、流石は井上はン、古うても破れても洋服を着てるだけの價值があるわい、その勢力で一番、ぐツと遣ツて貰ひたいもンぢや、どんな事があつても負ける氣遣ひなし、肥料の足らん玉蜀黍のやうに赤薄い、ほしやく〜髯の八卦屋奴と、晝に描いて關羽が閻魔はンのやうに、たツぷりと眞ツ黒な貴君の髯と、髯の生え工合からして違うてるがな、は、は、は、」

これに對する宗玄坊、また今日は市中の托鉢にも出ず、石作と朝鮮髯の二人を引き入れて、本來の面目、いよく〜一千七百則の公案を喝破する勢ひなり、



「心即是道、道即是心、この大安樂に對うて彼等の片々たる凡骨、わざわざ痛棒を喰はすにも及ばない、たゞこれ飛花落葉の風に從ふが如しだ、は、は、は、」

されど石作と朝鮮髯、首を揃へ聲を揃へての一生懸命

「たのむよ宗立さん、この長屋開闢以來の騒動で拙者の身に取っては生涯の大事件だからね、さう大安樂に濟まし込んで相手の飛花落葉を待つよりも、やはり此方から進んで痛棒を喰はしたいよ、あの贅六と古洋服、なか／＼一條繩の奴等ぢやアないぜ、うかく／＼すると逆寄せに押しつけて来るかも知れない、ねエ石作さん」

「眞實だ、油斷大敵、それに萬一、もし隣屋の杵臼が今にも警察から歸つて来ると相手は三人になるよ、大丈夫かね宗立さん」

宗立坊、ます／＼自若たり、

「多年の正念工夫、この大勇猛心に對つて凡そ何物の敵があるもんか」

「負けず劣らず口は達者なれど、悲しいかな年中の空腹に力のない奴等、加之も互に膏藥代の出處なきを恐れて、うかく／＼容易に摺み合も組打も始めず、たゞ雙方より小田の蛙の啼く音に等しく、がやく／＼と叫ひ合ひぬ、

をりしも其日の午後、ひよこりと無事に歸り来りし色情學者の富田剛太郎、ゆうべ一夜を警察の拘留所に留め置かひながら、實は豚小屋に劣る自己の埒よりは却つて食事の心配なく家賃の憂ひなく掃除まで行届いて居心地よければ、此奴さのみ驚かぬ顔色、懐手のまゝ平氣に濟まし込んで、まづ入口の朝鮮髯を差覗きぬ、

「八卦屋、今、歸つて来たぞ、ゆる／＼あらためて貴様に禮をいふ心算だ、は、ア兄弟分の千三屋も今日は蚊の脛を飛ばさず家に居るんだな、幸ひ二人とも出ずに待つて居ろ」

不意を打たれし石作と朝鮮髯、はつと思はず驚いて首を締めしが、そのまゝ奥へ立去る足音に、やうく顔を見合せながら俄の小聲、

「石作さん、いよく歸つて来やアがツたぜ、どうしよう、兼ての用意、聊か手筈が狂つた理由だね」

「さア、かう急に歸るとは思はなかつたよ、だから托鉢に念を押したんだ、油断大敵、うかくすると相手が三人になるから、なるべく本人の歸らない前、勝鬨を挙げたいと、ねエ」

それに付いて石作さん、たびく君も知ツてる通り、あの杵臼と托鉢は、是までの喧嘩に、いつも勝負なしの互角だせ、して見ると我々二人で贅六と古洋服を引受ける勘定だが、困るね、由來この拙者、智慧と策謀を以て如何なる敵にも恐れぬが、助太刀のない一騎打は心細くツて甚だ不得手だから、頗る閉口するよ、もし遁れん

場合は君、どツちへ當る覺悟だ」

「や、どツちとも確實に請合へんよ、ねんばりとして糞意地の我強い贅六も贅六だが、また近ごろ隣屋へ来た古洋服の化物、どうだい、まッ黒い髯の中から薄氣味の悪い目鼻を剥き出しやアがツて、第一こゝへ始めて来た時の状態からして蟲の好かない奴だ、いくら職工は雨降にも休めないにしろ、鬼の寒念佛ぢやアあるまいし、わざわざ何も天氣日和の洋服の下駄履で傘を脊負ツて来る奴があるもんかね、おまけに長屋中へ挨拶にも立廻らない奴で、そのくせ人の面さへ見りやア、いちく屁理窟を捏ね廻して、どうも手心の分らん變な野郎だ」

「おいく石作さん今こゝでそんな事を言ツても始まらないよ、さし當ツて、どうしよう、まづ兎も角も托鉢に相談して見ようか」  
「無論、その上のこツたが、もし萬一あの托鉢め、今更ら敵に降参も出来まいが、を

かしく凹んで妙な工合に我々二人を突き放すやうな事になれば、それこそ大變だぜ、こゝは充分、念に念を入れて固く組んで置くんだね」

「いかにも、寸善尺魔の世諺だ、敵が聯合して押寄せないうち早く味方の手配りをして置かう、石作さん、君が早速密使に立って貰ひたい、拙者この本陣を守ってるからね」

「いや、そいつア不可ない、やはり事の起りの本人が出るに限るよ」

「だがね、本人は却って敵の目に立つだらうよ、加中も托鉢の隣屋へ相手の杵臼が歸つて来て、その眞向ふが贅六で、現在この隣屋に障子の穴から古洋服が頑張ってるんだもの」

「なアに遁口は此方だ、そつと忍んで行けば宜いよ」

「遁口は此方でも、敵の重圍に陥るやうな事アなからうか、おや、石作さん、始まつ

たぜ、さア事だ、あの杵臼め、そろそろ贅六と何か大きな聲で話し合ってるよ、や

ア大變だ、たゝ大變だ、二人の足音が此方へ向いて来た」

本人の杵臼先生、ひよこりと無事に歸り来りて、まづ入口の八卦よい屋に一文句を差込みながら、自己の埒に入らんとするを、待ち兼ねし贅六、例の調子に飛び出すや否、今朝よりの委細に輪をかけて語れば、さらぬも宵越の癩癩玉を持ち續けし色情學者、そのまゝ踵を返して押寄せぬ、

頼まれもせぬ先鋒の贅六、本人を駈け抜けて、わざと隣屋の古洋服まで呼び立つる大聲、

「井上はん、いよく本人同士の直談判が始まりますぜ、もしあの托鉢がいくさると面倒ぢや、御苦勞ながら貴君、そこで喰ひ止めて貰ひたい、こりや案外面白うなツておいでたわい、はゝゝ、時に久しうもないが八卦屋、ついでに千三屋、さア、も

う遁れン場合と覺悟して、今この本人を叩き出すか、また二人が其まゝ出るかの境  
 目ぢや、實は雙方、どうなつても關はンが、なるべく早う埒を明けてくれンと、こ  
 の私は夕方から家業に出ねばならン、折角こゝまで出來た喧嘩の結局を見ないでは  
 氣が濟まん、心残りでならンわい、はゝゝゝ」  
 贅六を搔き退けて、ぬツと仁王立の杵臼、不意に驚く石作と朝鮮髯の頭上より泡を吹  
 き飛ばして喚き出しぬ、

「おい八卦屋、貴様ア人情といふものを知ツてるか、どうか斯うか人間に似た形狀だ  
 けは備へて居りますが、そんなものを存じませんと吐せば此まゝ許してやる、しか  
 し、きけば自分の事より他人の事まで立入ツて、この僕を叩き出すとか追ひ出すと  
 か騒いださうだな、やい、こら朝鮮髯、よく承れよ、この富田剛太郎先生は貴様  
 等と違ツて、そもゝ我々が遠く古い祖先の原始生物より久しく絶えず間斷なく遺

傳し來ツた男女兩性の靈妙なる作用、即ち生殖機能の一局を以て、種族發達の現實  
 外、戀愛快味の感情外、さらに高尚簡潔なる萬世不易の人道を産み出して今日の  
 社會を救はんとする破天荒の色情學者だぞ、それが貴様、考へて見ろ、たゞ一時の  
 幻影に等しい行政上の便宜から生じた警察力ぐらゐで、はゝゝゝ、苟くも阻害し得  
 らるゝもンと思ツてるか、何よりの證據だ、ゆうべ一夜、寧ろ愉快に大に警察の奴  
 等を片ツ端から論破して、今この通り無事に歸ツて來たが、どうだ、そりやア兎も  
 角、この僕が警察へ引かれる時、たゞ一口で濟む證明に對して貴様ア何と吐した、  
 同じ長屋に住ンでる僕を知らン人間だと言ひ切ツたね、金の證文に判は捺すが警察  
 向の證人は嫌だと言ツたな、念のために聞いて置くが八卦屋、この廣い世の中に誰  
 が貴様の請判で金を貸したいというて來る奴があるか、あれば喧嘩を止めて五六千  
 圓、一萬圓でも堪忍するが、あらためて頼みたい、ねエ義太夫さん、君だツて悪か

アなからう、ついでに願ッて見るが宜い」  
 さらぬだに口を藻掻いて言葉の間断を覗ひし贅六、俄に首を振り腰を曲け手を拍ッて  
 叫びぬ、

「知らん事なア、いかに人は外觀に依らんといふもの、まさか、この青細い八卦屋  
 が、それほど世間に偉い信用ある御方とは、夢にも存じませいで失禮千萬な、これ  
 まで段々と恐れ多い事ばかり申し上げたわい、しかし其處に氣脱けのやうな妙な顔  
 してる千三屋はン、現在かういふ金の蔓と兄弟分の縁を結びながら、何故まア毎日  
 毎日蚊の脛を飛ばして的目的もない外へ出なはる、燈臺の下は却ッて闇いといふが、そ  
 れでは石作の大將、あんまり闇過ぎるがな、い、い、い」

どうした事か、力と頼みし宗立坊は助けに来ず、杵臼と贅六の二人に嚙んで吐き出す  
 如く毒つかれて、あはれや石作も朝鮮髯も半泣きの澁面、ぐうの音も出し得ぬ向側よ

り不意に聞えし女の聲は瘡毒お六、

「さうぐくしいねエ、野暮の骨頂が、何をふざけてるんだらう」

額際に二個所の瘡毒と右の咽喉下に一個所の膏藥さへなくば、襤褸を下けても今この  
 八軒長屋へ落ち込まぬ筈の女振、くつきりと水際立ちし色白の浮世繪顔に、いきく  
 と張り切る目千兩、牙えきッて凄味を帯び、きゆうと引締りし丹花の唇端に、きかぬ氣  
 を含めつゝ、年は四十の上を二つ三つの今日まで如何なる浪風を渡りしか、名さへ何  
 とやら尋常女でない瘡毒お六、マツチの函を張りながら、向側の喧嘩を其まゝの聞捨  
 てに爲兼ねて、おもはず出せし一言、騒々しいね野暮の骨頂とは、どうしても昔の餘  
 波を我知らず現はしぬ、

内に凹んで泣面の石作も朝鮮髯も一時に首を擡げ、外に立ッて喚く贅六も杵臼も不意  
 に驚いて見返れば、少し膝を居向けし瘡毒お六、そツと額際の膏藥を軽く指頭に押へ

て、あたら女に色香を食ふ蟲の業、もはや聊か鼻にかゝる聲ながら、眼前の四人を丸めて吹き飛ばすが如し、

「何ですよ汝さん方ア、がや〜と喧しい、靜になさい、かけ離れてる往來の中央ぢやアなし、つい目と鼻の向側にも人が住んでるんですよ、もし退くに退かれぬ喧嘩でもするなら、くだらない餘計な無駄口を聞かずに男らしく取ッ組んで、ぎゆうとか、うんとか、早く始末を付けて仕舞った方が雙方お互に、さッぱりとして宜いぢやアありませんか、何故、さう蒼蠅く文句澤山に野暮たツぶりの七面倒でせう、全體かういふ長屋は萬事が心易い開けッ放して、家に雑作もないが人間にも苦情のないものと思つて來たにさ、來て見れば案外だよ、古い科白にある通り、奴唄が南瓜畑へおツこちたやうにこつ搦んだ事ばかり絶えない世界ですわねエ、ほ〜、今も聞いて居りやア、そこに突ッ立ッて頻りに吐鳴った何とか學者の先生、妾なんかの

耳に縁の遠い難かしい事は分りませんがね、近い事實が汝さん前夜、さのみ手柄にもならない警察で止められて來たといふぢやアありませんか、どんな事にしろ、よくない場所で一夜でも明して來れば、近所合壁へ對して少しは遠慮するもんだよ、巡查を凹ましたか警部に蹴飛ばされたか知らないが、まだ場數も經て來ない生意氣な斷け出し奴に限ッて、つまらない、妙な事を威張りたがるもんさねエ、女でこそあれ、妾の面前ぢやア口巾ツたいよ、それに何だね野狐を跛馬に乗ッけたやうな尻舞ひの上方贅六、どう間違ッて無事に箱根の山を越して來たんだ、あほらしいが行き過ぎたとは汝さんのこツたよ、うか〜すると墓場がなくなるからね、せめて身體の達者なうち方角を取損はないやう料簡を持ち直して元の故郷へ歸りなさいな、うかうかすると春先の隅田川へ迂り込むよ、ほ〜、また八卦屋も八卦屋さんだ、千三屋も千三屋さんだ、いろ〜外に不足はあるだらうが二人とも誰が見ても年齢に不足

のない人間で、加之も口が商賣で居ながら何の状態だね、道ツ端の石ツ轉でも足に躓けば音がするよ、あんなに小ッ酷く毒吐かれて、ぐうの音も出せないとは、よくお人よしに生れたんだね、つまり内と外の四人、ひッくるめて妾の目からア、わざく、止め女に出るだけの價值がないからね、こゝで此まゝ坐ッて居て、時の挨搦しますよ、雙方ともに馬鹿々々しい、お止しなさい、野暮な喧嘩より下手な都々逸の一句も唸ッた方が面白いよ、ほゝゝゝ」

石作も朝鮮髻も杵臼も贅六も、團子の如く一串に刺されて、ぎゆうとも、すうともいはず、そのまゝ音もなく呆れ返りぬ。

串削りの半助老爺、そろく尻を持ち上げて、例の鳶鼻を捻りながら、瘡毒お六の垢を差覗きぬ、

「はゝゝゝくだらねエ事で今ア、とんだ手間を潰しなすツたね、なアに實ア、わッしも長屋の義理で飛び出さうかと思ツたがね、つまり損のしねエ上方の義太夫と變てこな學者の出来損ひと間抜けた八卦屋に恍けた千三屋だ、どう間違ッても大丈夫、たゞ吟笛の吹きッ競で怪我のねエ空喧嘩だから、高を括ッて其まゝにして置いたのさ、はゝゝゝ」

瘡毒お六、手も休めずマツチの函を張りながら、ちよいと片頬に微笑を含みし風情、なるほど、見れば見るほど、さて惜しい女の廢棄物なり、

「おや、親方、御免なさいよ、もう直ぐ仕舞ひますから、しかしお互に蒼蠅いこッてすねエ、妾だッて、女ですもの、なるべく餘計な悪まれ口は、きゝたかアないンですがね、あまり騒々しくッて叶ひませんよ、目と鼻の先で、がやくと、それもね親方、少しは味のある乙な事件で、聞いて居て面白い文句の出る人達なら兎も角で





「眞實だ、わッしも考へて見りやア、とんでもねエところへ流れ込んて来たよ、この老年になツて」

「どうか妾も、この邊で行末が止まりたいもンさ、この上また流れて出れば、底の藻屑だからね」

類は友の世諺、この八軒長屋で自然に息の合ふもの、まづ石作と朝鮮髻、この瘡毒お六と半助老爺の二組なり、

あたら美顔に隠されぬ昔の極印三個所、いつれ尋常の女でないとは思へど、これは案外、あまり飛びぬけて尋常の女で無さ過ぎるほどの瘡毒お六、そろく物凄き本音を吹き始めぬ、

入らざるところに空力味して無用の口は達者ながら、いざといふ場合に實は何の罪も

手應もない石作と朝鮮髻、まづ第一番に縮み上りて顔色を失ひ、そもく、吾人々類の祖先以來といふ高慢面の生殖機能も、その後の杵臼さらに音も響かず、損さへ無くば誰彼なしの相手に取ツて面白半分には喚き出す流石の贅六まで、あツと呆れて聊か煙に巻かれし體、いちく屁理窟を捏ね出す古洋服の化物も恐れて容易に近づき得ず、結局かゝる時には是非一如の都合よい托鉢坊主、これ幸ひと避けて叨りに例の痛棒を振り廻さねば、たゞ何となく自然の氣に合ふ半助老爺を除く外、長屋中の一運托生、いづれも薄氣味わるく、俄に目を敬て、女一人の瘡毒を持て餘しぬ、

加之も男と違つて猶更ら底の知れぬ女、平常は脇目も觸らずマツチの函を張れど、人に對つて世辭愛敬の手の裏を翻せば、鬼の首でも煎じて飲んだかと思はるゝほどの毒毒しさ、いかなる浮世の浪風に漂つて来たやら、例の四人を吹き飛ばして以來、ますます長屋中に一種異様の凄味を放ちぬ、

されどこの瘡毒お六のため、八軒長屋の大騒物も一時に治まりしのみか、叩き出さうとした奴に自己まづ叩き出されんとした朝鮮髻、危急存亡の間一髪を免れて、ほつと思はず溜息を吐きながら、例の石作と四邊を憚る小聲、

「石作さん、危かつたね、あの贅六と杵臼め、だしぬけの不意に押寄せて来やアがつて、や、實に驚いたよ、加之も依頼に思つた托鉢が隣屋の古洋服に恐れて音も仕ないだらう、まさかの時は、あれでも昔とつた手取山、逃げ込む心算にして置いた奴が立坊に出で居ないだらう、流石の拙者も進退こゝに谷つて、たしかに三年の壽命は縮めたよ」

「眞實だね、まだ贅六は口ばかりだが、杵臼の手は動いて居たぜ、おまけに入口の方から我々の迷路を塞いで居やアがつたからね、一時どうなるかと思つたよ、もう朝鮮さん、これに懲りて以後一切、あゝいふ奴に關はないこつた、道理で勝つても無

理で負けるからね」

「しかし石作さん、どうだつたい、向側の瘡毒、こりやツ案外また凄味が酷かつたね、時に取つて幸ひ我々の助け舟だつたが、えらい女が流れ込で来たもんだね、無論、始めツから尋常女ぢやアないと思つて居たが、あゝまで物凄いな女たア知らなかつたよ、野狐を跛馬に乗つけたやうな尻舞ひの上方贅六、どう間違つて函根の山を越して来たかとは、流石の義太夫も呆れ返つて、ぐうも出なかつたね、第一あの杵臼、棒を呑んだやうに突つ立つたまゝ眞ツ白な目ばかり剥いて變な面アして居たぜ、はゝゝゝ」

「だがね朝鮮さん、我々の方も随分と手落なく無遠慮にコキ卸されたぜ、いろくゝ外に不足はあるだらうが二人とも年齢に不足のない人間で、加之も口が商賣で居ながら何の状態だ、道端の石ツ塊でも躓けば音がするよ、とは御丁寧に痛ましく有難く

遣られたぜ、よくくお人よしに生れたんだねと最後の一言、お譽めに預かつた時は我ながら朝鮮さん、なさけなかつたよ、普通の女でもある事か、世に捨てられた瘡ッ毒だぜ」

「なるほど、さうだな」

「今更ら氣が付いて、なるほどと感心する奴があるかね」

六趣輪廻の苦患、三塗八難の厄惱、それを悲しんで恐るゝにあらねど、たゞこれ一個の鐵鉢に物なき時は、焦熱無間の地獄よりも恐れ、をりく居酒屋に參禪して泥醉無心の境に到らずんば、殆ど無量劫數の春磨に遭ふよりも悲しき宗立坊、いよく今日こそは大勇猛心を起して脛の續くかぎり大氣根に市中を貫ひ歩き、久しく難みし餓飢道の空腹に思ふ存分、たらふく飲んでくれんといふ信心堅固、例の通り

網代の丸笠を深く戴き商賣道具の禪杖と鐵鉢を破れ衣の袖に卷添へながら、今しも我ために紅蓮大紅蓮の八軒長屋を立出でんとすれば、ぬツと有馬筆の如く膚せツ首を出せし入口の朝鮮髯、

「宗立さん、これからね」

宗立坊、立止りて振り返りぬ、

「了因佛性、今日は大勇猛の大精心を憤起して出るんだ」

「は、凡そ世の中に君の大勇猛心ほど確的にならないものは無いぜ、一昨日の喧嘩に拙者が進退これ谷ツた時、全體まア何をして居たんだよ、せめて聲だけでも出してくれりやア宜いに、頼み甲斐のない人だぜ、これから以後その覺悟で交際をするよ」

「や、あの時はね、生憎く坐禪を組み始めたから無念無想、豁然と人間を解脱して何

事も耳目に入らなかつたよ、もし入れれば愚劣闇鈍の凡骨ども、一句半偈の教誡に及ばず、忽ち飛花落葉の風に随ふ如く追ッ拂ッて遣るんだつたに、惜しい事をした、は、今度あゝいふ事があれば、その刹那を逸せず、喝破してやるから安心するが宜い」

「また飛花落葉が出た、君の飛花落葉ちやアとても安心が出来ない、どんな奴だつて宗立さんの風に随ふものは無いらしいぜ、は、は、は、」

「そこが縁なき衆生、濟度し難したよ、どりや市中、もろく有縁の徒輩に随喜喝仰の淨財をうけて来ようか」

そのまゝ、破れ衣の袖を拂うて立出でんとすれば、また向側の入口より瘡倉お六、

「ちよいと、待つて下さいな」

例の四人を吹き飛ばして以来、殆ど長家中を風靡したほどの勢ひに流石の宗立坊も聊

か氣おくれの體なり、

「何か用ですか」

「なアに別段、たいした事でもないんですがね、實は今日、考へて見ると妾が十七の時、始めて持った亭主、でもなし色男でもなしといふ乙な人の命日に當るんですよ、その人は日蓮宗で、妾は眞宗ですが、今かうなつて居て、どうも出来ないから幸ひ、法衣を着てる汝さんに念佛の一唱も稱へて貰はうと思つてさ、お氣の毒ですがね、ちよいと手軽く法華と眞宗の間の兒で、拜んで下さいな、まさか外の事と違つて、借りて置くも變だから心ばかりの御布施を現金で拂ひますま」

宗立坊、ますく面くらひぬ、

「いや、それには及ばないが、日宗と眞宗の間の兒は少々、困つた、愚僧また禪だから、つまり三宗門を融通しなければならん結果だ、はてな、どういふ工合に割り付

けよう」

「そこは何とか、都合よく誤魔化せば宜いぢやアありませんか、なアに其後に死んだ亭主で、妾と同じ宗旨の佛が十二三人もありますからね、おい／＼後は樂に一本調子で願ひますよ、ほ／＼」

法華と眞宗の子を頼まれ、これに自己が野狐禪の寢言を搗き交せて、開いた口から出まかせの阿呆多羅經を唱へながら、飄然と立出でし宗立坊の後より、また今日の浮世を何處に立ん坊の手取山、横に寝て居て喰ふ道なければ、あはれ六尺に近い骨太の大兵を、尻きり半纏一枚の破れ股引に素足の草鞋がけ、昔は力唾の額を撫でし手の甲に今は霜月の水漬を啜り上げながら、がた／＼震うて罫を立出でぬ、

「や、關取」

此奴、かうなつても關取と呼ばねば返事せぬ立ん坊、また用もない入口より長屋中の

出入を見張つて、いち／＼聲をかけねば氣の濟まぬ朝鮮髻、よい取組なり、

「八卦屋さん、寒いな、争へない十一月の末だ、どりや場所へ出ようか」

「場所とは流石、關取、どこの場所へ今日は出なさるい」

「おひ／＼と今時の奴等ア弱くなつた故か、折角あゝ出來てる諸方の坂道を切開いて、わざ／＼擴けたり均したり餘計な細工ばかりしやアがるんでね、錢が取れんわい、まア今日も相變らずの本場所で、九段か壹岐殿坂へ出る心算だ、うぬが腕ッ節の二三倍、ラんと慾張つて動きの取れない大八車の十五六臺にも出喰はしやア占めるが、重いものア汽車や汽船で軽い人間ばかり俥に乗つて飛ぶ世の中だからね、無効だよ、そろ／＼考へて何か外に割の宜い稼業を目ツける覺悟だが八卦さん、智慧がありやア貸して貰ひたい、かはいさうに何と見えるい、これが音に響いた昔の手取山勝之助だぜ」

「金を貸せと言ッちやア聊か困るがね、なアに出して減らない智慧を貸せといへば關取、随分と有り餘ッてる拙者だよ、いや心得た、お易いこッた、安心するが宜い、何か關取の身體相應に出来る藝を考へて見よう」

「頼むぜ八卦屋さん、生れて以來、智慧と分別の入らない丸裸一貫で氣樂に通して来た男だからね、かうなると閉口だ、途方に暮れるよ」

「なるほど、智慧や分別があッちやア邪魔になツて、さう大きくなれない理由だよ、現に拙者の身體から考へても、その筈だ、ところで關取、もう立ン坊するに及ばない、すぐに智慧が出た」

「感心だね、早いもんだな」

「響きに應ずるが如しと言ッてね、首を捻ねるまでもなく忽ち言下に吹き出すよ、即ち關取、かうだ、もう今年も後一月で、いよく回向院の春場所が始まる、ね、そ

こで、その櫓太鼓と共に俄の大金儲けといふは外でも無い、さうなると、東京中の新聞屋が例の通り狂氣のやうに、どれもく争ッて相撲の繪を入れたり取組の工合を出して騒ぐが、皆これ新聞屋に雇はれてる給料取の素人が耳で聞き嚙ッた種を書くんだから、とても眞實の呼吸や急所に簞ッてる筈がない、そいつを幸ひ此方の一手に引受けるんだ、ね、身體こそ利かないが昔とツた手取山勝之助、目が見えて術が分るだらうから委しう、いちく新聞屋へ教へてやるんだよ、すると新聞屋が喜んで、きツと大變な禮が來るぜ、どうだ關取」

「は、ア、いかにも、さうだわい、それを知らずに今まで勿體ない、この手取山を立ン坊に腐らして居たなア残念だ、憚りながら八卦屋さん、その道にかけては今時の四本柱や立行司より、ぐツと確實な乃公だぜ」

「さ、そこだ、そこを拙者、すぐ考へたんだよ、あ、我ながら智慧も出れば出るもん

だな

「ところが八卦屋さん、こゝに一事、困った事があるわい」

「おツと、皆までいふに及ばん、氣を見て言を知る、ちやんと心得てるよ、つまり字が書けないから新聞屋を相手に困るといふんだらう、それには幸ひ拙者こゝにありだ、安心しなさい、そもく拙者の文筆は以前この長屋に居た書生俳優の馬の脚に謝罪證文を書かせる時、口うつしに教へてやツた名文が何よりの證據だ、いくら本職の新聞屋でも拙者の文筆には定めて驚くだらう」

「こいつア出来たわい、有難い、ところで新聞屋から、どのくらゐの禮が來るもんだらうな」

「大きいぜ、こりやア關取、大きいぜ、あの小さな短かい字數で、一行が三十錢の五十錢のといふんだもの、尠くも日に七八十圓は請合だ、十日で七八百圓、關取、山

分だよ、兩分割だよ」

た、其場の戲談かと思へば、雙方とも互に目を剥き出しての本氣沙汰、加之も八卦よい屋め、をりく新聞社の門前で立ちながら素讀みの早合點、一行幾何の廣告料を此方へ呉れるものとの勘定なり、

もし満足に暮らして世間普通の妻子眷族あらば、とても無事に差置かれぬ奴、座敷牢へ打ち込まれるか癲狂病院へ遣らるべき筈の朝鮮髻、なれど幸か不幸か、いづれ劣らぬ二蓮托生の八軒長屋に住めばこそ、さのみ目立たず今日まで濟んだ奴なり、頼む奴も頼む奴なれど、立ん坊の手取山に智慧を貸してくれと頼まれ、金は無いが智慧は固より有りあまる拙者と吐して、吹き出した智慧が其場の戲談でなく、苟くも天下の耳目たる新聞社を相手に本氣の沙汰、回向院の檀太鼓さへ鳴れば、一行幾何とい

ふ廣告料の割合で此方へ取る總勘定、妙くも十日の間に七八百圓の兩分割とは、いよ  
 いよ以て八卦よい屋の分相應に天晴れ絞り出した智慧の凝固なり、  
 加之も朝鮮髻、色情學者のため思はぬ不意の災難に出逢うて、その夜の彌次馬に神易  
 の弓張提灯を踏み破られ多年の商賣道具を失ひ、やうく兩手に二三本を擱んで生命  
 からく逃け歸りし以來、あはれや末だ算木筮竹を新調する錢もなく力もなくて、こ  
 こに悄然たる折柄、自然に窮達こゝに我運命の一轉すべき時節到來なりと、ますく  
 夢中になつて立ん坊の手取山に有るだけの智慧を貸し出しぬ、

「關取、うかへ、他に洩らしちやア、いけないよ、實ア今でこそ白狀するがね、この  
 拙者これほどの智慧は平常に出ないんだよ、もしこの智慧が平常に出れば、かう貧  
 乏する理由は無いからね、いはゞ久しく宿つて居た關取の片運と拙者の片運が雙方  
 一時に何の氣もなく出喰はして、ひよこりと湧いた智慧が即ち二人に取つて一個の

幸福となつたんだぜ」

「眞實だ、さうかも知れないよ、ところで八卦屋さん、今が十一月の末だらう、回向  
 院の春場所には、まだ丸四十日もあるから、前以て東京中の新聞屋へ申し込んで置  
 いちやア、どうだらう、事に依ると手附として幾何づつか取れるぜ」

「なるほど、こりやア關取の智慧だ、いかにも、その邊の理窟はあるよ、此方へ早く  
 出して貰はう、此方へ委しく出して貰はうといふ新聞屋連中が今から内々の競争で  
 ね、こいつ面白い、なか／＼の妙案だ、關取にまで此智慧が出るとは儲、いよ／＼  
 二人の運が向いて來た、善は急げ、早速、明日の朝から新聞屋へ申し込んで、そろ  
 そろ手附金を取つてやらう、まづその手附金で今年の暮は浮世知らずの太平樂、久  
 しぶりに一陽來福の新年を目出たく迎へるんだな、は、は、は、」  
 をりしも例の義太夫贅六、此奴また一軒に二人の影を見れば必ず足音を忍ばして來る



奴、その塙を立出でし姿に八卦よい屋、はッと思はず首を縮めて兩手を宙に浮かしぬ、

「しッ、しッ」

手取山の朝鮮髻の私語低聲、はて妙な取組ぢやと立寄れば、俄に談話を止めて、しッ、しッといふ聲に其のまゝ黙ッて居れぬ贅六太夫、

「魚類氣のない此長屋へ猫の來る筈なし晝日中に鼠も出まいし、さりとて馬士も伯樂も住んで居らんに、しッくとは妙な聲ぢや、時に手取山關、どうだすいな、花は散ッても香は残る、わざく昔の最良客が尋ねて來て百圓紙幣の五六枚も祝儀に舞ひ込みまへんかな、流石に素人と違つて、いつ見ても大きい身體なア、わけて今日は大きい見えるわい、その大きい太い面前に小さう細う切干大根のやうに枯凋びて、しよんほりと坐ッてるのは誰ぢやい、はゝア、よくく見ると入口の八卦屋はンか、過日の一件以來、猶更ら顔の色が青細うなツて、とんと冴えン様子ぢやが、どこぞ

悪い事おまへンかな、時と場合の張合で一時の喧嘩はしても、根が親の仇敵でなし、氣にかゝるわいな、はゝゝゝ」

そのまゝ向側の三軒目、古洋服の塙を差覗いて獨言、

「不在かいな、もう出たンぢやな、毎日あの髻面の眼鏡越で、どれほど取れるか知らンが、この職工といふ奴、さのみ響めた藝でもないわい」

また立戻ッて此方側の奥の一軒目、色情學者の富田剛太郎を差覗きぬ、

「やア學者はン、どうして居なはるい、貴君まアこれ、いつも熊の膽を茶漬にしたやうな苦い顔して物を考へてぢやが、凝ッては思案に能はず、下手な考へ休むに似たり、あまり考へ過ぎると却ッて、また警察沙汰になりませ、過日の相手が長屋中の愛敬もんで、あの八卦屋といふ面白い相手なればこそ、この私も洒落半分、わざわざ暇を潰して貴君の味方した事はしたが、もう今度からは御免ぢや、おかけで

思ひも依らん、あの瘡毒女に、どえらい御馳走を喰うたわい、は、は、は、世間普通の女子なら随分、やッてこましたが、何分あれでは流石の私も閉口ぢや、上方三界から半分は藝で憎まれ半分は畫に描いたやうな美しい女子どもに追ひ落されて来た男ぢやでな、は、は、は、

左右兩側を饒舌り散らして、すツと自己が塹へ這入り込めば、待ち受けて壁一重の隣屋より串削りの半助老爺、例の鳶鼻を蠢かして大聲に笑ひ出しぬ、

「何だ、上方から女どもに追ひ落されて来た、は、は、は、平家の没落ぢやアあるめエし、凄まじい事を吐すぜ、もし女どもに縁があるやア海草天のやうに突き出されて来たんだらう、その變てこな四角張ツたしやッ面で外の事ア兎も角、女の沙汰だけ止してくれエ、聞き苦しくッて腹の蟲が痛くならア」  
きくや否、贅六また喚き出しぬ、

「うるさいな、ごちやくくと鳶鼻め、また入らざる羽音をさせ居る、四角張ツても洒ツ面でも、上方の女子どもが夜晝取巻いてな、是非とも貴君に限るといふ中を生命からく遁けて来た男ぢや、せめて噂でもしてやらねば、すまんわい」

「は、は、は、先方でも嘘、噂をしてるこツたらうよ」  
「そりやアもう、さう無うて叶はン筈ぢや、中には焦れて死んだ女子があらうも知れン、何故かう罪な男に生れて来たやら末の應報が恐ろしい、持ツた藝のために妬まれるか、女子の一念で取殺されるか、いづれ無事に助からン覺悟はしてるわい」

神易の弓張提灯を踏み破られて算木筮竹を失うたは斯うなるべき前兆、いよくこれで多年の八卦よい屋も止める氣、正しく我身の時節到来と心得て、猶も悉しく立ん坊の手取山と密談を凝らせし上、俄に元氣ついた朝鮮髯、いつも悄然たる夕暮に豆ラン

アの火を掻き立てながら、にこくと獨り笑を作りぬ。  
をりしも此奴また平常にない笑顔の石作、いづこよりか慌て、走せ歸るや否、しきりに蝦の如く跳ね返りぬ、

「さア占めたぞ、いよく占めたよ、この石作も今年の暮で浮び上る理由だ、喜んで貰ひたい朝鮮さん、實は昔の友達で随分、世話をしてやつた人間が今、大變な手廣い商人になつて居て、その男に今朝、ふと途中で出喰はしたんだよ、すると此風體だらう、無論、相手は苦勞人さね、入らざるこつたが、つまり昔の身分に對して現金は失禮だと思つたもんか、早速懷中から一枚の新聞を取出して、この賣物に出てる上根岸の或別莊を買入れたいが、幸ひ先方へ渡つてくれないかとの相談さ、こいつ福の神、委細承知と其ま、上根岸へ飛んで往つて、實地を見ると聞いたよりは立派な別莊建築で、おまけに價が思つたより二割方も安いと來たから早いよ、すぐ

また取つて返して友達へ話したところ、いよく雙方こゝに本極りとなつた、即ち八千圓といふ奴を、そこは多年の馴れた辯口に説き伏せて、七千五百圓に談判して來た差引の五百圓、この石作の掌上へ文句なしに黙つて載るとは朝鮮さん、どうだい、實ア昨夜の夢にも知らなかつたこつたぞ、加之も明日の午前中に雙方の本人を引合して、すぐに登記の濟み次第、その五百圓が耳を揃へて兎も角この八軒長屋へ一度は這入る理由だが、さて考へて見ると片時も置けない危険な場所だから、内々そつと守護して、どツか確實な銀行へ預けるんだね、どこの銀行が宜からう、久しく銀行取引を廢めて居たから、さつぱり其後の様子が分らないよ」

起きて居て夢でも見たか、頻りに騒ぐ石作の顔を、じつと見詰めた朝鮮髯、此奴また横にもならず寢言を吐き出しぬ、  
「や、ふしぎだね、石作さん、實は君ばかりぢやアないよ、この拙者また不意に七八

百圓を取ッて押へたよ、加之も雙方お互に同じ口で、やはり同じ新聞の種が福の神になるとは、猶更ら以て不思議の至極だ、夜の明け次第、いよく明日の朝から東京中の新聞屋を駈け廻ッて、まづ手附金だけ集めて來る覺悟だ」

「えッ、七八百圓」

「君より二三百圓は多いぜ、あはして都合千圓の餘にもなるが、どうしよう石作さん、うか／＼すると二人とも殺されるよ」

「だからさ、金を銀行へ預けると同時に二人揃ッて、この長屋を遁け出すんだよ、ぐづぐづしてると危険だ、しかし同じ遁け出すにしても、まさか斯う有難い事で目出たく遁け出すとは思はなかつたね」

「お互に石作さん、多年の運が團子のやうに固結ッて來たんだよ、どうだね、かういふ時に此ごろ流行る萬歳といふものを唱へようかね」

「なるほど、さうだよ、うツかりして居た、ぢやア朝鮮さん、唱へるぜ」

「よからう、なるべく小さい聲で、漏れると大變だ」

「八卦屋君、萬ざあい」

「石作君、ばアざあいッ」

石作は根岸の別荘を覗いて賣買の差引五百圓の笑顔、朝鮮髻は立ン坊の手取山と組んで東京中の新聞社より七八百圓を取る筈の手附金、互に其夜は一睡も得せず、曉鴉の聲に夜の明けるを待ち兼ねて蝗の如く飛び起きながら、四邊を憚りつゝ内々そツと雙方よりの小聲、

「いよく今日だぜ、朝鮮さん」

「拙者も今日だよ」

「ありがたいね」

「目出たいね」

二人うち揃うて一個の罫を立出でしが、また俄に首を傾け合うての私語、

「ねエ朝鮮さん、今日の五百圓を其ま、直接、銀行へ預けて来る心算だが、もし銀行の時間に外れると大變だ、どうしても一夜は現金を持って歸る理由になるからね、心配だよ」

「さ、その儀に付いて拙者も一方ならん氣を痛めてるんだ、何分にも容易ならざる大金だから、うかくこの長屋で寢られないよ、いくら秘しても石作さん、それほど大金になると自然、夜啼きをするさうだぜ、わけて居工合の違つた場所へ不意に持ち込むんだもの、お金様、御不足を唱へて自暴に大きい夜啼きをなさるかも知れないよ」

「ますく、困るね、どうだい、お互に何處か今日、落合場所を極めて置かうぢやないか、そこで二人、篤と相談した上また智慧を出すさ」

「なるほど、そいつア石作さん、うまいところへ氣が付いた、さればね、何處にしよう」

「それも朝鮮さん、なるべく人の立寄らない、淋しい閑靜な場所が宜いね、もし變な奴の目にかゝると付いて廻られるから猶更ら危険だよ」

「まづ上野だね、上野も入口は無効だ、ずつと奥か、近くて東照宮の社前あたりが人目に立たないぜ」

「や、上野、よからう、東照宮の社前だね、お互に時刻の都合があるから、どツちが先に往つても待つてるんだよ、外へ動いちやア不可ないよ」

「心得た」

あはれ石作と朝鮮髯、そもくいかなる母の胎内より生れ出た奴か、これで互に嘘のない本氣の沙汰、いよく眞面目に首肯合ひしが、またもや雙方より立寄って四邊を見返りながら、死際の蚊に等しき聲を發しぬ、

「石作君、ばアざいッ」

「八卦屋君ばンざアい」

一人は八千圓の別荘、一人は東京中の新聞社、左右へ別れて走せ去りぬ、

六年以來、ふしぎに病み煩ひもせず飢死もせず蚊の脛を飛ばして歩く彼是屋、千三といへど、千に一件も出來た事のない石作、同じ一蓮托生の徒輩にさへ軽く見られて、石川作藏と満足に姓名を呼ばれた事のない奴、されば此奴、そもく今日まで何をして生命を繋ぎしかといへば、つまり自己が直接の家庫地面を周旋するほどの力なく、實に市中の空屋々々を探し廻って、家屋地面貸借賣買一覽所といふところへ報告する

だけの藝、それも先方の常雇でなく、其日々々の放し飼にせられし自分免許の走り小使、空屋一軒の報告料金五錢也、

この五錢均一の石作が不意に五百圓といふ大金、まだ手に取らねど、取れる筈となれば、さらぬも元來が脳味噌の足らぬ奴、ほッとして夢が夢中に調子の狂ひ出すも無理のない奴なり、

その石作を天下の知己として、馴染の古顔いづれも去りし後に只二人、ほんやりと取残されながら、なほ刎頸の交りを結ぶ相住居の朝鮮髯、實は眞面目の時さへ石作より調子の狂うた奴が東京中の新聞社を相手に七八百圓といふ大金、加之も濡手で粟の摺み取となれば、此奴いかでか跳ね返らずに居らるべき、血の氣は逆に魂魄は飛んで地を踏む足は空なり、

この二人が互に生涯一度の萬歳を唱へながら、八軒長屋を立出でて飛鳥の如く左右に

別れしが、おのく今日の大金を手に入れた以上は、早くとも遅くとも上野の東照宮に待ち合して落ち合ふべき約束、いづれが前になるべきか後になるべきか、

冬の日の西に傾き易く、花なき上野の人影も薄く、はや夕暮の空となれば、猶更ら宵闇に奥深き東照宮の社前、枯木の樹間を漏れて池の端の火影、ちらくくと水にうつれるのみ、わづか隔てし廣小路は織るが如き車馬と人間の喧嘩場なれど、こゝには埒の鳥の羽音もなし、

春ならば花に歸るを忘れて酒に酔ひ残る人もあるべし、夏ならば友なくとも涼風に誘はれて徘徊ふ人あるべし、秋ならば月なくとも露を踏んで蟲の音を聴く人あるべし、されど今この霜枯の宵闇を縫うて歩み來る足音は例の二人、いづれが先かと思へば石作ならで八卦よい屋の朝鮮髻なり、

それにしても元來の慌て者が、この暮れ果てし上野の闇路を、ふしぎや切株の根にも躓かず立樹に突き當つて鼻柱も擦り剝かず、樹間より漏るゝ星影りを便りに足音重く、ほそくと力なげに歩み來るは、流星の此奴も二日越の夢こゝに覺めて、どうやら聊か正氣に返つたらしい體なり、

聊かたりとも正氣に返つて見れば、人間の運勢を手取る如く饒舌りながら、六年以來の八軒長屋を貧乏動きも出來ざりし朝鮮髻、果は九尺一間の家賃さへ拂へ兼ねて石作と相住居の奴が、東京中の新聞社を相手にして七八百圓を掴まんとせし業、横面の一撃も喰はず巡査の手にも渡らず無事に濟んだが不思議の至極なり、

東照宮の社頭に近づいて、ほつと溜息を漏らしながら、四邊を星明りに見透しつゝ、聲を潜めて呼び出しぬ、

「石作さん、石作さん、居ないかね、まだかね、石作さん」

やうく自己の夢だけは覺めしが、まだ石作の夢を見残して、しきりに名を呼びながら樹間々々を這ひ歩きぬ、  
加之も一軒の新聞社で正氣の付く奴ならねば、あはれや今日の一日を食はず飲まずのまゝ都下の二十八社を駆け歩いて、さらぬも平生の營養不足に元來の瘦せこけた奴、猶更ら五體は疲れる腹は減る、聲さへ枯れて半泣きの體なり、

「石作さん、おい石作さん」

呼べども探せども音なく影なく、果は木の根に吸ひ付かるゝ如く腰うちかけて、腕を組みながらの一思案、

數が多くて相手の多い新聞屋と違ひ、はや約束の極りし根岸の別荘一軒の賣買に登記所だけの事、實は我より先に來て待つべき筈の石作が、どうした理由か、斯う遅くては心細し、せめて彼奴だけでも首尾よく占めて來れば、まさか拙者の泣面を見ても居

られぬ交誼上、たしかに二割か三割は拜み倒して取る工夫もあれど、早い石作が遅い拙者に探されるほどの場合、もし雙方お互に泣面の鉢合せであるまいかと思へど、此まゝ探さずに居れぬ朝鮮髯、またもや中腰に立って空腹を絞り出しぬ、

「石作さん、石作さん」

いづこともなく幽に蚊の啼くが如き聲、

「居るよ、こゝに居るよ」

「え、居る、どゞ何處だい石作さん」

「こゝだよ」

「こゝでは分らん、どこだよ、も少し大きい聲で」

「濟まないがね、實は君より先に來てるんだよ」

探し歩いた朝鮮髯より、實は探される石作が先へ來て居ながら、今まで大木の根方に



隠れて無言の筈なく、さては此奴も同じ空の泣面、やうく互の聲と聲とに闇の中を這ひ寄りぬ、

「朝鮮さん」

「どこだい」

「こゝだよ、こゝだよ」

「酷いぜ石作さん、あれほど呼んだ聲が聞えなかつたかね」

「いや、聞えて居たよ、居たところぢやアない實ア斯うしてる眼前を二三度も往つたり來たりした事は知ってるかね、どうも呼ぶ聲に力が無いやうだつたから、つい、此方も變な氣になつて、急に返辭が出来なかつたんだよ」

「拙者の聲に力が無いから、返辭をしかねたや、石作さん、いけないのか、君も無効かね」

「朝鮮さん、どうしよう」

「こりやアなさけない、拙者の方から君に、どうしようと言ひたいんだよ」

「だつて、かうなつた今更ら、どうもしようが無いよ」

「ないでは困るよ」

「困るつて、困るぢやアないか」

「しかし石作さん、君の方は既に取極つた別莊一軒の賣買で、加之も今日は登記するだけの事だから、さう困る理由がない筈だ、同じ無効でも拙者の無効とは、よほど無効の工合が違つてるだらう、まさか泣つ面の握拳ぢやアあるまい、幾何かになつたらう」

「ところが朝鮮さん、かういふ筈でない筈が、ふしぎに斯うなつたんだから、猶更ら閉口だ、がツかりしたぜ、よくく運が無いんだね」

「一文にもならないのかい」

「いや、一文にもならない、といふほどでも無いがね」

「さうだらう、どうしても君の方が筋は善かったよ」

「しかし最初の算盤とは大分、勘定が違つてるからなア」

「違つても何でも、やはり君は運に向いたんだぜ、それに引替へて石作さん、拙者の方は案外も案外、あまり案外過ぎて、お談話にならん始末だよ、どれもく見上げるような大きな家を構へて、うよくくと人間ばかり澤山に居るがね、およそ此新聞屋といふもんに一軒として理由の分つた奴がない、現在、自分の社の利益になる事で、加之も直ぐに来る春場所を控へながら、あれほど理に詰んだ拙者の考案を受付けないからねエ、いやはや、世の中は盲目千人だ、時に石作さん、君は幾何になつたい」

「さア、そこだよ、大風も吹かず大地震もないから、どう間違つたつて一夜に別荘の飛ぶ筈はなし、また賣ると極めた方に固より故障のある筈は無いのだがね、さて買方に俄の金の都合があつて、折角だが一時まづ見合せと聞いた時は、この石作、ほつとしたね暫時の間、全く變な心持で、氣が遠くなつたよ、みすく手に入れた大枚五百圓が俄の不意に外れたんだからねエ」

「拙者の身に考へて猶更ら察するよ、しかし五百圓は遁けても、空手でないだけが結構だ、羨ましいよ、一割にしたつて五十圓だ、幾何になつたい」

「五十は五十だがね、圓ぢやアない錢だよ、五十錢さ」

「えッ、五十錢、石作さん、たゞの五十錢かね」

「あまり氣の毒だから、晝飯でも喰つてくれと言つてね」

この石作、最初より實は五十錢銀貨一個で弄ばれし奴なり、

たとひ大地を叩く土は外れても、こればかりは間違ひのない筈といふ石作の五百圓が、同じ五の字ながら五十錢銀貨たゞ一枚と聞いて、流石の朝鮮髻も暫し物も得言はず、あつと呆れて猶更ら情氣返りぬ、

「石作さん、五百圓は間違つて遁けても幾何か取つたといふから、一割にしても五十圓は確實だと思つたに、五十錢は酷いね、あまり五百圓が遁け過ぎて残つた算盤の桁が違ひ過ぎるよ、實は拙者の方が今いふ通りの始末で、たゞ君の方ばかりを力にして居ただげ、その君が五十錢とは驚いたよ、なさけないね、その五十錢で石作さん、どうなるい、まんじりとも寢ずに昨夜から今朝へかけて、二度も萬歳を唱へ合つたぢやアないか」

「いくら萬歳を唱へても、かうなる時は朝鮮さん、かうなるもんだよ、今更ら仕方がないよ、だつて五十錢で二日もかゝつて、わざ／＼この上野の奥へ落ち合つた理由

ぢやアないかね」

「さういへば、さうだが、それならそれで石作さん、自分が先へ来て居だんだもの、せめて返辭だけでも、即事してくれ、ば宜いに、あれほど探し歩いた拙者に徒勞な氣を揉ましてさ、加之も現在、それとは知らず眼前を二三度も往つたり來たりさすとは、罪だよ、むごいよ」

「いや何、決して、さういふ氣ぢやアない、つまり此方が五十錢銀貨一枚で、がっかりして居る時だからね、猶更ら君の方を考へて、どういふ工合かと暫く様子を窺つて居たのさ、ところが半泣きの聲で、石作さん／＼と呼び廻る調子が、いよ／＼頼もしくないからね、實ア急に返辭する張合が出なかつたんだよ、わるく取つて貰つちやア困るぜ」

「お互のこつたから別段、わるくも取らないがね、しかし石作さん、この上どうしよ

う、まだ君の方は自分一人できへ承知すりやア、五十銭の取り得で物の諦めも付くが、この拙者は知ッてる通り、あの手取山といふ相棒があるから、甚だ困るよ、實は手取山め、これがために安心して前後三日、立ん坊にも出なかつたからね、きつと何か文句を吐すだらう、文句だけなら宜いが石作さん、彼奴、腐ッても相撲取の果で、あの圖體だらう、考へて見ると拙者、とんでもない奴と組み合ッたよ、何だか妙に氣持が善くないよ」

「なアに朝鮮さん、その事に付いては、さう心配するに及ばないよ、相手が總身に智慧の廻り兼ねる大男だからね、わけなく、どうとも誤魔化せるが、その手取山より何より實は此方の手取らず山が哀れだよ、凡そ世の中に馬鹿を見るッて、これほど御丁寧に念の入ッた馬鹿さ加減はないね、うかく長屋へ持つて歸れないの、いや生命が危いのと言ッたなア、つい今朝のこッたぜ」

「仕方がない、まア生命だけは無事と思ッて石作さん、そろく歸らうか、この闇の中で、いつまで泣事を言ひ合ッても納まらないよ」

「しかし、朝鮮さん、同じ人間で同じ日だが今朝の氣持と現在の氣持とは、かうも違ふもんかね、まるで自分ながら一人とは思へないよ」

「や、眞實だ、何となく無常を感じて來るねエ」

石作と八卦よい屋の智慧より出る事、もし萬に一つも出來てこそ不思議なれど、出來ぬが當然を残念に心得て半泣きの愚痴を滾し合ひながら、やうく星明りに上野の闇を立出でて廣小路を見渡せば、ぱつと俄に夜の明けたるが如し、

「石作さん、これだねエ」

「どれだよ、何だね」

「ものゝ二町とも隔たらない僅の違ひで、ぐつと世界が變ッてるよ、どうだい、今更

「始めて驚くでもないが、この賑やかさは、闇の中から出て来ると目が眩ゆいね、つまり我々二人の運命も石作さん今朝と今夜の事を考へると、この通りだぜ、なア」

「なるほど、さうだねエ」

「時に石作さん、君と拙者ア何故、かう善いに付け悪いに付け、離れられないんだらう」

「これまで多年の間、あまり善い事は無かつたが、いつも悪い事だけは、ふしぎに交誼よく深い縁だねエ」

「なアに悪い事に付いて、こゝまで交誼よく深いのだから、もし善い事がありやア猶更ら一層お互に打ち解けて深くなるぜ、いは、前世からの約束だよ、もし君か拙者か一人が女なら石作さん、大變だな」

「いや朝鮮さん、こりやアお互に男だから却つて、いけないだぜ、折角、向いて来

た一個の運が二個に分れる理窟だからね、その分れる時に分れ損つて、つい餘所へ外れるんだらうよ、さうで無きやアみすく手に入つた今日の五百圓を、あゝ不意に取遁す筈がないよ、もしこれが夫婦なら人間は二人でも一對と言つて、つまり一人だからねエ、来て見た運の奴も俄に狼狽へないさ」

「そりやア石作さん少々、聞き辛いよ、さういはれて見ると何だか、君の五百圓は拙者のために遁けたやうだからなア、また拙者に向いて来た七八百圓の運だつて君のために紛つて、どツかへ遁けたと、いへる理由になるから、こりやア雙方、五分五分で互に氣の悪くなるだけ餘計な損だよ、面白くないよ」

「おい、朝鮮さん、うかく、饒舌つてると電車が来るよ、そら車だ」

「いや電車でも車でも石作さん、理窟は理窟で、今いふ通りだらう」

「さう理窟づめになると喧嘩になるばかりだよ、どうだね、どうせ斯うなつた以上、

もう自棄だ、せめての腹癒に此五十錢、二人で奢ッて仕舞はうか、久しぶりで何か暖かいものを食はうぢやないか、また明日は明日の風が吹くよ、實は一日飲まず食はずだからね」

「ありがたい、濟まないが石作さん、どうか、さういふ工合に願ひたいね、拙者また其うちに奢り返すよ、第一は今日の悪魔拂ひだ」

「お互の交誼で奢るも奢らないもないさ、まして斯うなッた上は猶更だ、自分の一人占めに出来るかね」

石作、歩みながら懐中を探りしが、俄に立停ッて慌て出しぬ、

「やッ、たゞ大變だ」

「どうしたい」

「ない、五十錢、ないよ、どツかへ落して仕舞ッた」

「えッ」

朝鮮髻また俄に狼狽へ出して、舞鼠の如くきりく舞ひ、

「どこへ、どこへ落した石作さん、落したところは何處だよ、はッきりと言はないぢやア、わからないよ」

みすく手に入ッた筈の五百圓が、あはれや五十錢銀貨たゞ一個となり、その五十錢銀貨を虎の子の如く懐中へ捻ぢ込みしに、いつの間にか落して影も形もない南無三寶の呆れ顔、まして飲まず食はずに一日を駆け歩いた空腹の石作と朝鮮髻、ほんやりとして氣ぬけの如くなりぬ、

「朝鮮さん、たゞの五十錢と違ッて五百圓の五十錢だ、あの五十錢を落すやうぢやアもう世の中に生きて居ても前途の運が知れてるよ」

「とんだ事をして仕舞ッたなア、何故また落すやうな、うツかりとした持方をするン

だね」

「どうして、實は懐中の中央へ捻ぢ込んで、加之も絶えず片手で確乎と握ッて居たんだよ、それが、かうなるとは、よくく運に盡きたらしいぜ」

「考へて見れば見るほど、なさけないねエ、今日に限らないから腹の空いたのは二の次さ、折角其の五十錢で二人の悪魔拂ひをしようと思つたに、やはり悪魔が拂ひ切れない我々かな」

「たゞ運を取遁すばかりでなく、さう悪魔に纏はれてるかと思へば、いよく世の中が嫌になるね」

「石作さん、流石の拙者も何だか陰に閉ぢられて、妙に氣が減入ッて來たよ、急に面白く無くなッて來たよ」

「眞實だね、かう不思議に運が悪く續き出しちやア、この後を思ひやられて、生きて

る甲斐がないよ、いくら貧乏しても、どうしても、今に浮ぶだらう浮ぶだらうと思つて、やツと今日まで無理に繋いで來た生命だからねエ、もし今このまゝ苦しみますに樂な死にやうがありやア朝鮮さん、死にたいよ」

「なるほど、さうだなア、いッそ石作さん、思ひ切ッて、死んで仕舞はうか、お互に金は取らないが、年齢は取るだけ取つたし、後に心の残る家も地面も妻子もなし、や、今まで氣が付かなかつたが、石作さん、死んで宜い人間は我々だけ、この上野で、こんな氣になッて、幸ひ池の端の近いのも何かの因縁だらう、どういふもんか拙者、さのみ死ぬ事が嫌でも無いやうな心持になつたよ」

「實は此方も變な氣になッて來たよ、急に生きて居たくなくなつたよ」

「石作さん」

「何だい」

「やらうか」

「やツても宜いが、どういふ丁合にやるんだね」

「今いふ通り、幸ひ池が近いよ」

「水かい」

「水が嫌なら、すきな木も山に澤山あるぢやアないか」

「ぶらんこは御免だ」

「ぢやア、やはり水だよ」

「その外にないかね」

「その外は刃物だが、刃物は買ツて来る錢もなし、血が出て痛いよ」

「それも、さうだなア」

「兎も角も石作さん、池の端まで出かけて、その上で篤と相談しよう、なアに覺悟を

極めた以上、さう慌てるに及ばないさ、人に追ツかけられて斬られるンぢやアなし、ゆるく考へて、お互に異存のないところを、やらかさう、つまり君と拙者の情死だからなア」

をりしも更け渡る池の端、不意に撞き出す上野の山の鐘の音、二人の空腹に響いて、はッと思はず飛び上りぬ、

浅草の宵闇に狼狽へて萬人に一人、神易の弓張提灯に欺され身の上の相談するものありとも、現在、同じ長屋に住んで居ながら、この八卦よい屋に智慧を借らほどの奴、手取山より外になし、

加之も此奴、あはれや馬鹿正直に何の疑念もなく、三日以前より立ン坊を止めて、九尺一間の中央に六尺近い大胡坐を掻きながら、はや回向院の四本柱にでも坐り込んだ



氣、いよく今日こそ東京中の新聞屋が手附金を持って来る筈と、頻りに八卦よい屋の歸るを待ち受けぬ、

人目には貧乏神の如き朝鮮髻なれど、今日この手取山には福の神に等しく、をりく長屋の外まで出迎ひ旁々、空を仰いで日脚を見ながら獨言、

「朝、夜明に飛び出して、かう遅い筈アないが、どうしたらう、しかし聞けば東京中に二十幾軒といふ新聞屋の数だから、なるほど、さう早くも出来まいよ、いちく金を受取るだけでも随分、手間が掛るわい、待てば長いやうだが、やうく今、正午を過ぎたばかりだ」

そのまゝ自己が塀へ立戻つても、また黙つて居れぬ獨言、わけて平生よりの大聲は、昔の我を今の身に響かして、餘所ながら長屋中へ聞けとの自慢談話なり、

「さア、かうなれば寢ても起きても男だ、枯れても腐つても昔の手取山だ、いよく

運が向き直つたわい、もう立ん坊はしないぞ、考へて見りやア勿體ない、よく今まで馬鹿々々しい、この身體を麓末に扱つて、あんな事をして来たよ、わざく金の茶釜を土の中へ埋めて置いたやうなものだ、は、は、は、とところで今度の春場所へ、この乃公が目を張るとなれば、四本柱も何も入つたもンぢやアない、第一また親方衆のうちに乃公を知つてるものがあつて、あれこそ音に響いた手取山だといへば自然の奮勵で、相撲取にも氣が乗つて、八百長なンかアしたくも出来まいよ、嗚呼、もう十年も若けりやア、どツかの部屋から不意に附け出されて、櫓太鼓の皮が破れるほどの面白い、回向院の番狂はせを遣つて見たいがなア、取りたくないものは年齢だ、いつまで取りたいものは土俵の上だ、今更ら返らないが、や、惜しい事をしたよ、あの時あのみ、兩國の橋を渡つて居りやア、どんな奴でも、ぐいぐ引ツ張り込で、三役は無論のことだ、うまく出て働けば横綱も張つた身體だ、一年を二

十日で暮らす好い男、あ、どすこい〜」  
されど八卦よい屋、どうした事やら、なか〜急に歸ッて來ず、いつしか日は夕暮の空を眺めて、この横綱、泣き出しさうなり、

古三味線ながらも流石に商賣道具、ふけ渡る夜露を厭うて皮を包みし心掛は殊勝なれど、雨でも矢でも徹らぬ面の厚皮に何を厭うてか、帽子代用の置手拭とは此奴、入らざる眞似をする贅六太夫、はや十一時過ぎの間に勞れし足を引摺ッて、やう〜歸り來りぬ、

されど何事か饒舌らねば氣の濟まぬ奴、そのまゝ黙ッて無事に自己が塙へ這入らず、まづ右側の入口、石作と朝鮮髻の相住居を差覗きぬ、

「居ても居ないでも火を點したといふ事のない奴ちやが、は、ア、まだ歸りくさらん

な」

左側の入口は例の瘡毒お六なれど、これは此奴の苦手、その隣屋は立ン坊の手取山、ふしぎに今夜は豆ランプの餘光、ほツと破障子より漏れ出しぬ、

「お、關取、まだ起きてる工合ぢやな」

内より手取山の聲、

「義太夫さん、今かい、もう何時だ」

「生憎、金時計は持たんですが、もう十二時に近いな、いつも早寢の關取が今頃まで全體、まアどうした事ぢやい、え、石が流れて木葉が沈んだら知らん事、また返らん昔日の事でも思ひ出して目が冴えたといふ理由なら關取、止しなはれ、未練らしい、どう焦ッても、枯木に花は咲かんわいな、は、は、は」

「いや、義太夫さん、實アその枯木に花の咲く事があッてね、人の歸るのを待ッてる

ンだよ」

「枯木に花が咲く、それで人を待ってるとは、誰を待って居なはるンぢや」

「あの八卦屋を待ってるのさ」

「あの八卦屋とは、この長屋に居る朝鮮髻の八卦屋かいな」

「さうさ」

「は、は、は、こりや面白い、こりや不思議ぢや、こいつ洒落てるはい、は、は、何を祕

さう關取、この私その八卦屋に今夜ある場所で逢うて来たがな」

「逢うて来たア、ど、何處で逢うたい何時ごろ」

「まア沈着いて、さう慌て、はいかん、實はな、今夜、ちよつと方角を變へて上野邊を流して来たが、あの池の端で、闇の中に何やら動いてる物があるぢやないか、犬かと思へば人間らしいので、近づいて見ると關取、は、は、は、思ひも依らん八卦屋と

石作が、どうした理由か互に抱き合うてな、あほらしい、おまけに關取、くしくくと泣いてるンぢやがな、は、は、は、」

「な、何だつて、池の端で泣いてる、石作と二人でか」

「まだ呵しい事には關取、あの池へ飛び込んで死ぬと吐し居るわい」

「えッ、死ぬ、死なれて堪るか大金だッ」

手取山、だしぬけに贅六を突き飛ばして踊り出しぬ、

腐ッても枯れても相撲取の果に突き飛ばされし贅六、きやツと叫びしまゝ暫時は物も

え言はず起きも上らねど、やうく氣を取直して我に返れば、五體の動くよりも先づ

口の動く奴なり、

「どえらい目に逢はし居ったぞ、親の仇敵でも名乗ってからの太刀打ちやに彼奴め、理由も吐さず人の胸を突き飛ばしくさつて、おのれまア、どこへ狼狽へ出したか知ら

ンが、その分で置くんか、あ痛、た、痛いぞ、痛いぞ、さア急に立てンぞ、こりや尋常の疼痛でない、もし筋か骨でも、いや、さうでもないかな、ないにしても、あ痛、痛いぞ〜」

無事の時さへ誰彼なしに搦み付く贅六、まして痛いくくと唝鳴り散らす聲を聞いて、長屋中この相手に出るもの一人もなし、

「更が更けても寝て居ても、この聲の聞えン道理があるかい、え、それに一人、どいつも出居らんとは、義理も人情もない奴等ぢや、覺えて居くされ、以後どんな事があつても知らぬ顔の半兵衛で見物してこますぞ」

やう〜起き上れど、まだ中腰の贅六、右側の軒下を傳ひながら、今しも自己が堪へ這ひ込まんとする時、ほそ〜と長屋の入口へ人の足音、振返つて廂際の星明りに見透せば、どうやら二人の影、石作と朝鮮髻の歸つたらしい様子なり、

「や、死損ひめ、うろ〜と今ごろ歸つて來居つたぞ、さア彼奴等ぢや、事の原因の彼奴等を其まゝ無事に寝かして堪るもんか、夜が明けても一談判してこまさう」

そのまゝ自己が堪へも入らず、この夜深い痛みし胸を押へながら、わざ〜また這ひ戻つて、そつと破障子の外より窺へば、まッ暗闇の中に果して石作と朝鮮髻の二人、今の聲に驚いて息を殺せし體、贅六ます〜癩癩玉を振り起しぬ、

「あとに心の残る金も女房もないに、八卦屋と千三屋の幽霊め、何に迷うて戻りくさつた」

ぐわらりと障子を引開けて這ひ込めば、ごそ〜と遁け廻る物音、どこの白痴も氣狂病院も無事に寝込んで、もはや狼狽へ出さぬ夜の十二時過に、一點の火の氣もない破畳三枚を舞臺として石作と朝鮮髻と贅六太夫の三人が互に這ひ廻りながら暫し無言の暗闘、これで夜半の洒落にあらず寢惚けの戸迷ひにあらず、本人の身に取つては氣の

「確な奴等なり、」

「さア此奴、捕捉へたぞ、誰ぢやい」

「拙者だよ、拙者だよ義太夫さん、さう荒く袖を引いちやア破れるよ」

「なんぢや、袖が破れる、こら八卦屋、袖どころか死神に引き摺り込まれるところを助けてやツた恩人ぢやぞ、その恩人に禮も吐さず、ごそく遁け廻るとは全體、どういふ理由ぢやい、相手の千三屋、どこに居くさる」

「こゝに居るよ、板壁に喰ッ付いて吊戸棚の下に居るよ、どうか靜に願ひたい、わざわざ何も遁け廻る理由ぢやアないが、實ア二人で、不圖、あゝいふ事にまでなりかけて、無事に歸ツたもの自然、まだ氣が引立たないからね、更けては居るし、そツと此まゝ這ひ込んで夜の明け次第、あらためて禮を言はうと思ツて居たんだよ、ねエ朝鮮さん、ところが唐突に酷い權幕で押込まれたから、つい妙な機會で、かう

いふ變な工合になつたのさ、なぜ今まで物も言はず互に探り合つたらう、考へて見ると馬鹿々々しいね、よく摺み合を始めなかつたこつたね」

「いや、それなら、それで兎も角この場は濟んだが、儲こゝに濟まん事が一件あるわい、あの手取山が全體どういふ理由で、この私を突き倒して飛び出したんぢや、何でも二人に關係があるらしいぞ」

「え、手取山が飛び出した、そりや拙者だよ義太夫さん、どゝ何處へ」

「それこそ暗に打出す鐵砲玉ぢや、どこへ飛んだが方角は知らんが、池の端で二人に出逢うて、かうくぢやといふや否、この私の胸板を持て餘しの阿呆力に突き飛ばしくさつてな、や、えらい災難を喰うたわい、まだ痛いぜ、もし相手が相手なら無價で置く奴ぢやないが、はゝゝゝいかな私もあれでは叶はん、うかくすると盜賊に追錢ぢやがな」

「さア大變だ石作さん、どうしよう、さういふ勢ひで飛び出したんだから、歸つて來ると拙者、いよく事だよ」

「は、ア、八卦屋の關係か、こりや面白い、あ、夢中になると彼奴、なか／＼偉い糞力で、どんな無茶苦茶を遣らかすか知れんぜ、本人でない私にさへ息の根が止まるほどの目に逢はしくさる奴ぢや、うツかり出來んぜ」

「石作さん、君は一方で助かるが、どツちへ廻つても拙者の運命いよく、挾撃だよ、何とか遁れる工夫ないかね、實は義太夫さん聞いて貰ひたい、彼奴に頼まれて拙者らよいと智慧を貸したのが事の原因でね」

「頼まれて智慧を貸した、は、は、人間に三本の毛が足らんといふ猿に相談する奴あツても、あほらしい、ぢやら／＼と、この八卦屋に智慧を借る奴があるかい、そろそろ談話が込み入つて來た、暗闇では興がない、點火を付けた點火を、マツチは私

が持つてる、どうせ今夜ア徹夜ぢや」

神易の弓張提灯は淺草の彌次馬に踏み破られて以來、あはれや不運つゞきの朝鮮髻いまだ新調の時節到來せず、石作に一個の豆ランプあれど、悲しや一月あまり絶えて石油を注いだ事なく、また贅六太夫は他人の事で自己の火の氣を持ち出す奴にあらず、三人こゝに眞ッ暗闇の膝と膝とを突き合はして、をり／＼談話の急所々々にはマツチを摺り出しながら、ぱツと燃ゆる間一髪に互の顔を見合す體、旅に行暮れて闇の夜の稻妻に落ち合ひしが如し、

「は、は、全體この談話といふ奴、くら闇では氣の乗らんものぢやが、儲また斯ういふ鹽梅に饒舌るだけ饒舌ツて置いて、をり／＼ぱツと不意の火影で顔を見合つた工合、なか／＼興があるわい、もしこれが女子なら猶更ら面白いな、恥づかしいところは闇黒で思ふ存分いはして仕舞うて、いよく事の極ツた時に嬉しい顔と顔、こ

いつ妙ぢや、流石の私も気が付かなんだ、残念千萬、この術で遣れば今まで多くの女子どもに入らざる物思ひもさせず、いちく念願を晴らしてやツたに、みすくそれと知りながら、や、むごたらしい事をしたわい、は、は、は、

「おい義太夫さん、この中で暢気に洒落飛ばされちやア困るよ、少しは拙者の氣にもなツて貰ひたい、あの手取山め、今にも歸ツて來たら、どうしたもんだらう、女子共も嘸、むごたらしからうが、かうなると拙者も随分、むごたらしいよ、ねエ石作さん」

「眞實だ、義太夫さん、かういふ場合の取捌きは性根の据ツた上方の人間に限るよ、何とか中間へ這入ツて無事に治める工夫は無からうが、考へて見ると朝鮮さんの方が可哀さうに割が悪いよ、元來さう澤山に有り餘ツても居ない智慧を絞ツて貸したんだもの、よし事が間違ツたツて實ア借りた奴に不足のない筈だ、その手取山が義

太夫さん、今にも歸ツて來て手荒い事をするとなれば、この石作、どうしても黙ツて居らないところだが、いやな事には相撲取の果だ、なるべく相手にしたくないよ、こゝは一番、僥倖と言ツちやア濟まないが、だしぬけに胸板を突き飛ばされた因縁から搦み付いて、何とか押へて貰ひたいもんだね、朝鮮さん、是非とも頼むが宜いぜ」

「頼んでるよ、くら闇で分るまいが拙者この通り、先刻から手を合して拜んでるくらゐだ」

贅六、ぱツと不意にマッチを摺り出すや否、ちらと見れば、口ばかりの朝鮮髻、狼狽へて懐中より手を出さんとすれど、生憎袖裏の破れ目に引ツかゝりて急には出ず、まごくするうちに火は消えぬ、

「どうも石作さん、昔から此江戸で流行る懐中合掌といふ奴は、人の目に立たなくツ

て損だね、やはり上方風の兩の手を外へ出して拜んだ方が尋常らしいよ、ねエ義太夫さん」

「知らんがな、あほらしい、そろ／＼と夜明に近うなッて来た、どりや館へ引取ッて一睡しようかい、いづれ其うち手取山が歸ッて來せたら、どさくさと目の覺める物音が聞えるぢやらう、は／＼、うるさい長屋なア」

自己の身に取ッて面白からねば、相手の時と場合に關はず其まゝ坐を起ッて、さッさと歸り行く贅六太夫、加之も出かけに廂と廂の間より空を仰いでの捨言葉、

「まだ東は白まんが、この星の鹽梅では、そろ／＼もう夜明に近うなッて來たわい、明日も好い天氣ぢやなア、しかし八卦屋は千三屋はン、いつまで黒闕で鼻と鼻とを突き合して居ても同じ事ぢや、まア兎も角あの手取山が歸ッて來た工合で、どんな無茶苦茶を遣り居るか知らんが、まさか生命に別條はあるまい、擲られるか蹴ら

れるか、痛い目さへすれば濟むわいな、は／＼、」

そのまゝ、自己が堪へ歸り行きし後は、まッ暗闇の中に石作と朝鮮髻の二人、泣くにも泣かれず、寢るにも寢られず、もはや工夫も思案も盡き果て、出るものは二人の溜息ばかりなり、

「石作さん、とんだ事になッたね、そろ／＼夜が明けるぜ、手取山め歸ッて來るぜ、どうしよう」

「さア、どうしたもんだらう、巧く此方の楯になりかけた贅六が、あゝいふ奴だからね、猶更ら困るよ」

「石作さん、考へて見ると此ごろ流行るもんに、ろくな事アないね、お互に生れて初めて唱へ合ッた萬歳が、これだからなア」

「眞實だ、めでたい筈の萬歳が潰れて、かうなるし、味方になりかけた贅六が逃けて、



あゝなるし、これで手取山に痛い目をさせられちやア堪らないよ、もう生涯一度の金に懲りたが、こゝで生涯一度の智慧を出さずに居れない」

「ところが生憎、その智慧も出しきって仕舞ったからなア」

「いや、君は出しきったらうが、この石作まだ少しは残ってる筈だ」

「残って居ればこの場合だ、無理にも融通して貰ひたいね」

「あるよ、あるく、あるぜ朝鮮さん、かういふ時こそ我々の力と頼む熊さんだ、何か事がありやア知らせろと言ってくれた熊さんの親切こゝだよ、これから京橋へ駆け付けて熊さんに来て貰はう、いくら贅六でも手取山でも、あの熊さんが出た以上、文句のいへる奴等ぢやアないよ、もし萬一また金といふ事になれば、熊さんの背後に大浦の大將が控へてるからな、鬼に鐵棒だ、この鬼の鐵棒を今まで忘れて居たよ」

「や、易の所謂窮して通ずるの理だ、拙者も忘れて居たよ、なぜ今まで気が付かな」

「それが不可ないよ、まだ熊さんの來ない前から、さう生り出しちやア困るよ、もし手取山が今にも」

「ナアに實ア熊さんの來てくれるまで、この吊戸棚へ這入ってるさ、つまり敵の銳鋒を避けて一時に盛り返す戰略だ、かうなると拙者にも、まだ智慧が残ってると思えるね石作さん」

「それが不可ないよ、まだ熊さんの來ない前から、さう生り出しちやア困るよ、もし手取山が今にも」

「ナアに實ア熊さんの來てくれるまで、この吊戸棚へ這入ってるさ、つまり敵の銳鋒を避けて一時に盛り返す戰略だ、かうなると拙者にも、まだ智慧が残ってると思えるね石作さん」

石作は其ま、飛び出し、朝鮮髻は三尺の吊戸棚へ這ひ込みつゝ、次第に間も薄らいで、がらりと夜は明けしが、どうした事か手取山も歸らず、今かくと一步先へ飛んで來る筈の石作も歸らず、鬼に鐵棒の力と頼む熊さんも來てくれず、いよく夜は明けて、

三尺の吊戸棚より首を差出す朝鮮髻、張子の虎の店曝しに等しく、じろく無言に四邊を見廻しぬ、

折しも真正面の破障子を音なく引開けて、ついに見馴れぬ烏打帽子の男一人、ぬつと現はるゝや否、不意を打たれし朝鮮髻、はつと猶更ら驚いて思はず首を縮めし戸棚の前に、はや其男の聲は近づきぬ、

「おい、こら、出る」

「出るといへば出ますが、全體どこの人です、謝辭もなく拙者の宅へ、第一また唐突に、おいこらとは甚だ面白からん人だ、この長屋に住んで居ても外のものと違ひ、かりそめにも、神易を以て業と致す身分ですぜ」

「文句いはずに出る、ぐづくすると引降すぞ」

「引降す、いや、ますくけしからん事をいふ人だ、降りてよければ拙者が勝手に降

りる」

「ぢやア何のために戸棚の中に隠れてるんだ、ますく怪しい奴だ」

「や、這入る理由があつて自分の戸棚へ自分の這入ってるのが、どういふもんで怪しいんだ、黙って挨拶もなく他人の家へ押上つて来る奴の方が、よッほど怪しいぞ、何の用で来た」

「警察からだ」

「えッ、け、警察」

「さア出るか、出ないか、兎も角この名刺を見ろッ」

差出す姓名の上に刑事巡査の四字、一目みるや否、吊戸棚より手鞠の如く轉け落ちし襟首を其まゝ引ッ掴まれぬ、

「恐れ入ります、お、恐れ入ります、さういふ御方様とは少しも存じませんで、とん

だ失禮を申し上げましたが、長屋中へ御聞き下さいましても、警察なんかへ、お伴いたす人間では御坐いません、どうか石作の歸りますまで、只今、すぐに熊さんが来る筈になつて居りますから暫時、警察は甚だ拙者」

「こら靜にせい、こゝで騒いでも無効だからね、おとなしく来い、もし来ないと、ふんじばるぞ」

「まゝまゐります、まゐりますが全體、どういふ理由で拙者、かうなるんで御坐います」

「うるさい奴だなちやア、搔い抓んで聞かせがる、この長屋に住んでる立ん坊が前夜の二時過ぎ、上野の新坂下で汽車に跳ね飛ばされて大怪我をしたんだ、加之も九死一生の蟲の息で、同じ長屋の八卦屋に大金を持ち遁けされたから、それを追ッかけて来て斯うなツたといふんだ」

朝鮮髻、俄に半泣きの大聲をあけて手足を藻掻き出しぬ、

「やア拙者の一大事だ、長屋中に出て貰ひたい、あの手取山め、とんだ事を吐しやアがツたよ、それがため拙者かういふ災難に出ツ喰はすんだ、これを見捨て、置かれちやア困るよ、今だ、今だく連れて行かれるよ、助けてくれッ」

朝鮮髻が生涯一度の智慧を絞って生涯一度の災難を仕出來し、泣きながら刑事巡査に連れ行かれし體を見るや否、第一番に飛び出したは例の贅六、今さら俄に長屋中へ喚き立てぬ、

「さア事ぢや、あの阿呆ン多羅め、どこへ納まるかと思へば、いよく警察へ納まりくさつた、しかし一列の長屋中、かうなつて見れば自然の人情で、まさか此まゝにも捨て、置けんわい、平生は兎も角も隣屋の半助はン、こりや交誼の悪い私の事で

ない、勿論その次の井上は、髻を生して目鏡をかけた洋服の手前でも何とかしてやらねばならん、また向側の別嬪お六姐は申すまでもなく優しい女子の事、つづいて宗立は、托鉢ばかりが能でない人を助ける出家の役目こぢやぜ、いづれも揃うて出て貰はう、わけて警察へは一夜でも止められた覺悟のある色情學者は、是非とも貴君が相談頭になつて欲しい、や、片棒の千三屋まだ歸り居らんな、さア出た〜」

これが此奴の病癖、人を呼ぶにも其まゝでは呼ばず、いち〜文句を付けて喚き散らせば、長屋中、いづれも癢に觸へて面を出すものなし、

「どうしたンぢや、出てくれンかいな、いかに人情深うても、この私一人では長屋中の義理を背負ひ切れンぜ、さア皆、出た〜」

しきりに出た〜と喚けど、出るもの自己の外に一人も無ければ、拍子ぬけの贅六、

聊か案に相違して手持無沙汰のまゝ、元の穴へ逆戻りの折しも、慌て、走せ歸る石作、此奴また長屋の入口より吐鳴り込みぬ、  
「占めたぜ〜、いよ〜熊さんが來てくれるよ、朝鮮さん、朝鮮さん、どこに居るンだい」

聞くや否、贅六また再び飛び出しぬ、

「やア千三屋さん、遅かつた〜」

「遅いもんか往路も歸路も一生懸命だ、この霜月に汗が出てるぞ」

「いや貴君は早からうが、かはいさうに八卦屋の身に取つては、遅かつた〜、もう熊さんでも虎はンでも後の祭禮ぢや、あかんわい」

「な、何故だ、なぜだ」

「えらい事が出來たわい、警察へ連れて行かれた」

「えッ、警察、どうして」

「委しい事は知らんが、何でも事の原因は彼奴、あの手取山らしい鹽梅ぢや、それに付いて今この私が長屋中へ相談しかけたが、どうも此奴も不人情に一人として出くさらんわい」

相住居の石作が歸りし聲を聞いて、流石に他の事とは違ひ、長屋中いづれも一時に立出でぬ、

中にも贅六とは犬猿の半助老爺、例の鳶鼻を蠢かして總體の音頭を取り始めぬ、

「なアに石作さん、考へて見るが宜い、この長屋に躑も聾もない筈だが、出るなど言ッても出ずにやア居れねエ場合だ、ねエ皆さん、しかし飛び出して騒ぐ奴が奴だから、つい汝さんの歸るまで差控へて居たんだ、さア何とか工夫せずアなるめエ、もし眞實の親切で他より先へ騒ぎ出したもンなら、どうなるか、さしづめ上方言葉の

文句澤山で、ねち／＼したところを警察へ振り向けて見ようぢやアねエか、其奴の

こなされ工合で凡そ見當が付くだらう」

贅六、はッと驚いて音もなく、自己が塀へ飛び込みぬ、されど口だけは凹垂れず音のする奴なり、

「吉原か洲崎か、女子どもの巢でもあれば知らん事、あほらしい、警察へ探り玉に入られで堪るか」

第一番に飛び出して騒いだ贅六一人、却ッて今は自己が塀に音もなく、長屋中いづれも立出でて相談の眞ツ最中、久しぶりの熊さん急ぎ足に入り来りぬ、

それを見るや否、石作まづ狼狽へて目を剥き出しながら俄の大聲、

「大變だ、熊さん、大變な事が出来たよ熊さん、どうしよう朝鮮髯が警察へ連れて行かれた、委しい事は知れないが、やはり今朝、あらまし話した手取山といふ立ん坊

が事の原因ださうだよ熊さん、かうなれば猶更ら力になつて貰ひたい、今この通り長屋中へ心配かけてる最中だ」

いづれ面倒な出来事と承知して来た熊さんも、これは案外、あまりの不意を喰うて暫し無言のまゝ立寄りしが、俄に心付いて長屋中への挨拶、

「まだ初対面の方もあるやうですが、皆さん、とんだ御厄介を掛けますよ、どうもね、あの八卦よい屋は舊時から調子外れの頓狂に出来た奴で、しかし御承知の通り根に罪も悪氣もねエ底の見え透いた人間ですから、なアに一時、ちよいとした災難でせうよ、いづれまた事と場合で、御手数も掛けますが、幸ひ昔馴染で腐れ縁の遁れねエ、わツしが引出されて来ましたから用は足りないにしろ、兎も角この石作と相談の上、あらためて御挨拶を申しませう、おい千三、いくら心易い長屋の方でも、ただ立って騒いで暇を潰しちやア濟まねエよ、慌てず静に内へ這入んな」

そのまゝ石作を引入れて、眉を蹙めながら腕を組みし熊公、

「困るぢやアねエか、二人ながら何故、さういふまで相變らず恍惚過ぎるんだよ、貧乏世帯の乃公の家なら宜いが、よく物を考へて見ろ、京橋の中央で大通路に向つた三階建築の洋館の夜の明け切らねエ薄闇に、どん／＼戸を叩きやアがッてさ、おまけに空氣枕を押し潰すやうな變な泣聲で、店の衆の手前もあらアね、仕方がねエから旦那に申し上げたんだ、ところが、あゝいふ旦那だ、有難く頂戴しろよ、わざわざ枕頭の手箆筒へ手をお伸ばしなすつて、十圓紙幣二枚、どうせ金で濟む事だらうから二人へ遣れ、もし足らなきやア、あとで足してやると仰しやツたんだぞ、こゝん畜生、よく罰も中らねエで無事に歸れたなア」

「熊さん、何とも申譯のないこッて、實に大將の思召、痛み入るね、ますく見上げた方だね」

「汝に見上げられて旦那も嘘、御本望だらうよ」

「いや眞實だよ、時に熊さん何は儲置いて朝鮮警の警察、どうしよう」

「そりやア、こゝへ来て不意に喰った事だが、外と違つて警察向は乃公も困るよ、少しも手加減が分らねエからな、しかし幸ひ旦那の世話になつてる辯護士で、絶えず乃公が使者に行く先があるよ、すぐ引ッ返して萬事その先生に頼んで見よう、今も長屋中へ挨拶した通り、なアに根が夢のやうな八卦よい屋だ、善い事も出来ねエが、また人並に悪い事も出来ねエ人間で、罪のある筈アねエよ、たまに半日か一日ぐらゐる目先の變つた警察へ留めて置かれる方が彼奴のためだ、これに懲りて今後、ありもしねエ智慧な人か人に貸すめエからな」

「なるほど、さう聞けば大した心配も入らないやうだね、かはいさうに彼奴、生命を縮めるぜ」

「早く生命を縮めた方が本人の幸福だ、あんな工合ぢやア、いつまで長生したつて無効だよ」

「しかし熊さん、縮める生命は外で縮めてやりたいよ、警察で縮めちやア、少々むごいよ」

「や、それも、さうだな、ぢやア直接、これから引ッ返して辯護士の先生に頼んでやらう、汝も同伴に来るが宜い、また何かの用があるだらう」

「行くとも、無論、行くよ、ところで熊さん、大將の下すつた十圓紙幣二枚は、どうなるんだ、かうなつたのも實ア金の間違ひから起つた理由だからね、早く安心をさせて貰ひたい」

「いやな奴だなア、黙ッてる、相手は熊さんだぜ、二人を揃へた上に渡してやるんだ」

一度は八軒長屋の九尺一間に陣を引いて寄せ来る敵を防ぎしが、そのまゝ兎も脱がず軍門にも降らず、天晴れ再舉の商旗を翻して今また京橋の中央に清韓貿易の大浦商會、巍然として峙ちぬ、

家は鐵骨石皮の洋館、巍然として立ちし奥の一室に主人の大浦卓三、ますく肥え太りて二十貫以上の大兵肥滿、のツしりと相變らず大胡坐を組めば、闕越の熊公また相變らず青竹を割った如き男なり、

「どうした、どんな事だった」

「いや、どうも斯うも、お談話になつた奴等ぢやア御坐いませんよ、借りる奴も借りる奴に出来て居りますが、あの八卦よい屋が貴君、人に智慧を貸しましたといふ理由で」

「は、は、は、こりやア面白い、どうしても間違ひの起る筈だ、加之も飛んで来たのが千三の石作、猶更ら妙だ、は、は、は、全體、どいふ人間が借りたんだい」

「どうせ貴君、ろくな奴ぢやア御坐いませんよ、實ア其後あの長屋も段々と入れ變りまして、いろんな化物が居ります中に田舎相撲の果で手取山とかいふ立ん坊、此方が借主で、東京中の新聞屋を相手に五百圓を取るの、いや七百圓になるんだとか、は、は、は、夢にも見られない馬鹿けた事から貴君」

「八卦屋め、大變な智慧を貸したもんだな、は、は、は」

「あまり馬鹿氣きつて委しい事は申し上げませんが、つまり間違ひの起るやうに出来た事が、首尾よく間違つた理由で御坐いますから、別に不思議も何もない筈が、この立ん坊め、とんだ本氣の沙汰で、わざく夜の夜半に八卦よい屋を上野へ探しに出たといふ騒動、加之も狼狽へて新坂下の汽車に跳ね飛ばされたとかいふ大怪我、



まるで段取が嘘のやうぢやア御坐いますが、かはいさうに貴君、立ん坊の怪我は眞實の九死一生で」

「む、さうかい、八卦屋の智慧も侮れない、案外そりやア大事だな」

「ところが貴君、その立ん坊め、蟲の息で、あの八卦屋に大金を持ち遁けられたと言つたのが、また間違ひの種になつて、八卦よい屋が警察へ引かれたといふ間違ひ、最初から最終まで間違ひだらけで持ち切りでしたが、怪我と警察は雙方、二人とも間違はずに、やらかしましてね、捨て、も置けませんから、甚だ勝手がましよう恐れ入りますが幸ひ、お出入の黒川さんに兎も角、お願ひ申しまして」

「よく氣が付いた、黒川が警察へ出たんだな、どういふ工合だつた」

「は、せめて人間相應に五錢とか十錢とかいへば面倒ですが、彼奴等が東京中の新聞屋を相手に五百圓とか七百圓とかいふ大金の持ち遁けで御坐いますから、警察

の方でも笑つたまゝ八卦よい屋を吐り飛ばして、すぐに濟んださうで御坐いますが、濟まないのは立ん坊の災難で、とても助かるまいといふ事で御坐います」

「そいつア大變だ、乃公の知らない立ん坊だが、乃公の居つた長屋で乃公の知つた八卦屋から、さうなつたとすれば、まさか聞捨てにもなるまい、たゞ氣の毒ぢやア心持が悪い、どうせ療治は養育院か警察に關した病院ですらうが、せめて息のあるうちに自由に喰ひたいものを喰はしてやりたいね、兎き角も三十圓ばかり持つて往つてやれ」

「畜生め、とんでもねエ智慧を出しやアがツたぜ、いや、實ア今朝、戴きました十圓紙幣二枚、彼奴等二人に遣らす黒川さんへ、お渡し申しまして、早速立ん坊の方へ遣はしましたが」

「そりやア氣轉だつたな、しかし三十圓また遣るが宜い、あらためて石作にも八卦屋

にも十圓づつ遣り直すさ、あれ等に怪我アないが驚いて青くなつたらう、ちよいとした事にも二人ながら揃って、よく腰を抜かした人間だからね、はゝゝゝ」

「なアに今朝の十圓づつを遣らない代りに二人の横ッ面、いやといふほど張り飛ばしてやりましたから、もう差引は付いて居る筈で御坐います」

病人か狂人か犯罪人でない以上、無事に達者な人間が何處を歩いても彷徨いても差支なけれど、青天白日の下に朝鮮髻と石作が連立って、ひよこく、京橋の中央を歩み行く風情、いとゞ猶更ら青く細く物の哀れに目立ちて、おもはず往來の人に振り返られぬ、それも其筈なり、蝙蝠の如く夕暮の八軒長屋を飛び出して淺草の宵闇に多年の臆勝たる八卦よい屋と、あまり眞生面より日の照らぬ場末の横町か裏道ばかりに蚊の脛を飛ばして歩く千三屋、いはゞ浮世に用のない亡者二人が相伴うて頻りに何をか私語さな

がら、電車に驚き人車に狼狽へて、織るが如き人間に迫り廻されつゝ、きよろくくと前後に遁け廻る體、晝にも描けざる圖なり、

なるほど兼好法師の名言、見苦しからぬものは塵塚の塵と、やはり此奴等は住むべきところに住むべき奴、うかく人間の捨場所を出るべき奴でなし、

されど本人みづからは人間の屑とも思はねば、この京橋の中央を白晝に彷徨いて、さのみ見苦しからぬ心得、

「ねエ石作さん、二人かう揃って、わざくお禮に行くんだから、大浦の大將も定めて喜ばれるぞ、いかにも義理の固い人間だと思つてね」

「そりやア、さうとも、同じ長屋に住んで心易くした我々二人は大將と親類も同じ理由だが、あの手取山ア無縁の他人さ、その顔も知らない手取山へ、いくら不意の災難だつて大金を下さる筈アないよ、やはり我々二人から事の起つた間違ひで、こゝ

を今かうして置いてやれば、行末また何かの力になる頼もしい我々と思ッて在らッしやるからだよ、すれば猶更ら、いよく義理を固くして厚く、お禮を陳べないぢやア濟まない、大將、居てくれ、ば宜いがねエ」

「もし御不在なら、お歸宅まで待たうぢやないか、や、乃公の歸るまで待ッて居てくれたかと、いよく満足に思はれるぜ、全體、どこだよ」

「そこだ、そら、その三階の西洋建築で金文字の看板が出てるよ、清韓貿易商、大浦商會、ね」

「なアるほど、立派だなア、いかにも眩しいやうだ、それに付けても石作さん世の中ア、心弱く無常を感じるもんでないね、いくら喰へない時があッても、お互に今後、もう死ぬ氣は出すまいぜ、どう見たッて、誰が考へたッて、こゝの御主人が、あの長屋へ落ち込んで居たと思へるかね」

「眞實だ、あまり正直過ぎて同じ穴にはかり小さくなッてるから、貧乏神め、好い氣になりやアガッて我々を馬鹿にするんだよ、をりよくかういふ工合に方角の違ッた場所へ出て氣を取直すんだね、現に今日だッて吾妻橋を渡るまでは貧乏神め、うか平生の心得で付いて來やアガッたが、不意に斯ういふ立派な西洋館へ這入るンから、面くらッて、どうかなッたかも知れないぜ」

「さういふと石作さん、氣の故か拙者の身體も何となくナッいて、そろく歩の運びが軽くなッたやうだ、また吾妻橋を渡ッて待ち受けてる貧乏神に取ッ付かれちやア大變だ、歸る時は兩國を渡ッて少し通路は遠いが、本所の搦手から柳島邊で一息を入れた後、そつとね、音のしないやう藻漕り込まうぢやアないか」

「おい、朝鮮さん、行き過ぎるよ、こゝだよ、こゝだよ」

「心得た、拙者まづ案内を乞はう」

自己が分相應の八軒長屋に住めばこそ、さのみ目立たぬ朝鮮髻と石作が打揃うて、雨でも降る事か、わけて其日は天氣快晴に最も業務の繁忙を極めし午前十時ごろ、京橋の中央に巍然たる大浦商會の眞正面より、店頭へ乗り捨てたる俵と自轉車の間を縫ひながら、ひよこくくと歩み入りし體、黒死病か肺病のバチルスに似たり、もし熊さんに出喰はせば物もいはず横面を張り飛ばさるゝ奴ながら、をりしも幸ひ、主人の大浦卓三が目早く見付けて、乞食と間違へし店員を制しながら四邊かまはぬ例の洒々落々、大口を開けて高く笑ひぬ、

「はゝゝゝやツて來たね」

かゝる時には自己の身も顧みず時と場合に恐れ氣もなく、石作を掻き退けて出酒張る八卦よい屋、十餘年來こゝに持ち傳へし黒の山高帽子を脱いで、ほしやくの朝鮮髻を捻ねりながら、いかにも仔細らしき顔色、

「これは大將、久しく御意を得ませんが、其後ますます御繁昌で、相變らず御壯健の體を拜し奉り、高田幸運齋、忝しく謹んで御祝辭を申し上げます、また過日は、これなる石作、とんでもない事で不意に罷り出まして、いやはや、何とも恥ぢ入った次第、それがため今日、かく兩人うち揃ひ改めて御挨拶に、御禮かたぐ伺ひました儀で」

浅草の宵闇に出る口上めいて饒舌り立つれば、石作また負けぬ氣に貧乏首を突き出しながら、どうしても此奴は千三屋の周旋口調なり、

「奥様も其後、別段お變りなく在らせられますが、お妹様さま、いかゞ遊ばしました、定めて何處へか、もう御目出たい御相談の出來ます御芳紀で、もし萬一まだで御坐いますれば、幸ひ石作、さる筋目の宜しい御大家より兼々お依頼を受けて居りますから」

流石の大浦卓三も、白晝の店頭、この兩人に攻め込まれて、始めは面白く笑ひしが今は聊か持て餘せし體、満面を皺めながら俄に振り返りぬ、

「おい、誰か奥へ往つて外套と紙入を持って来い、これから此二人を連れて晝飯を食ひに行くからね、まア宜い黙つて居れ、乃公が連れて行くんだよ、熊は不在か、ぢやア俵は入らない、歩いて行かう、いつもの料理屋だぞ、もし用がありやア電話をかけるよ」

聞くや否、朝鮮髯、はつと急に一步を後方へ退きながら、ます／＼以て仔細めきぬ、  
「や、大將、それでは恐れ入ります、今日は只お禮に伺ひましたばかりで、ねエ、石作さん、御辭退を申さないかね、どツかへ連れて行くと仰しやるよ」

「眞實で御坐います、この御繁忙の中を私ども、どう致しまして、また伺ひますとも今日のところは一まづ、お暇を、いづれ近日」

さうかといへば、それで其まゝ無事に歸らぬ奴、また近日、のこ／＼來られては猶更ら蒼蠅い奴等と、大浦卓三、急いで店頭を立出でぬ、

「さア二人とも、そこに立って居ては却つて困る、ついて來るが宜い、久しぶりで奢らう、は、は、昔馴染が尋ねて来てくれたんだからなア」

二人の餓鬼亡者、ひよこ／＼またもや動き出しぬ、

「石作さん、痛み入るね、これだから拙者、心得て居ながら、わざと平生は御無沙汰するんだよ」

「しかし折角の思召を無にしては、相濟まん理由だよ」

「なるほど、それも、さうだなア、それぢやアお伴しようかね」

「殊更ら御馳走を下さると思つては失禮だから、つまり御晝食の御相手に我々がお伴するんだよ」

「いかにも、さうだね」

大浦卓三、歩みながら振り返りぬ、

「おい、喧しいね、往來だ、黙って歩けないか」

腰かけの膳飯屋でさへ、近來は満足に腹を肥した事のない奴が、大浦卓三のため柳橋の料理屋へ連れ込まれて、向河岸を見渡す川添の裏坐敷に通され、身も埋まるばかりの絹の座蒲團に上せられ、山海の珍味を眼前に並べられた石作と朝鮮髻、生挿られたる貧乏神の如し、

「ねエ石作さん、たゞお手軽く、ちよいと御晝食の御伴をする筈だったに、案外、かういふ結構な御馳走に預かるとは、夢にも存じ寄らん事で、實に恐縮の至極だよ、いッそ此ま、御辭退を申し上げようか、あまり冥加に餘ッて拙者、この後の運が恐ろしいよ」

「なるほど、一應は道理な次第だが、さういふ遠慮は却ッて失禮に當るよ、第一お厭ひのある方なら時と場合で此ま、御辭退も出来るが、折角、かうして下すッた御馳走を、みすく、箸も付けずに引退ッちやア大將の思召を無にする理由だ、猶更ら相濟まないよ、お互に後の運は兎も角、現在この眼前の運を早速く素直に戴かうぢやないか」

「や、その邊の事も拙者、心得ないではないがね、易に曰く」

「吐ッ、吐ッ、こゝで淺草を出しては、いけないよ」

床柱に脊を持たせし大浦卓三、おもはず天井を仰いでの高笑ひ、

「は、は、は、神易も淺草も儲置いて、まア早く箸と盃を兩手に持つが宜い、もう正午を過ぎたよ、しかし急ぐには及ばないぜ、別に用のある身體でも無からうから、ゆるゆる落着いて、ウンと食べて、ウンと飲んで、昔とツた杵柄、面白く祕し藝でも見

たいもんだね、は、は、は、」

「ますく、恐れ入るね石作さん、どうしよう、やはり戴かうか」

「有難く頂戴するより外に、我々の身分として、どうしようがあるかね」

「いかにも、ぢやア大將へ拙者まづ御盃を獻じようかね、但し君から差上げるかね、而して後お流れを受けるのが、かういふ席の禮だよ石作さん」

大浦卓三、片手を宙に打振りながら、自己が前の盃に片手の獨酌、

「なアに構はず、此方は勝手にするから二人は二人で飲むさ、實はね、わざと女中どもに來ないよう、手を鳴らすまで避けさしてあるんだ、その代り今に酌する女は女で三四人、來る筈だが、どうしたか、遅いね、は、は、は、」

をりしも廊下を摺り來る優しき足音、すつと隔ての障子を開けて、すらりと時ならぬ花の顔を並べしは、土地に名を得たる選抜の藝妓五人、みるや否、大浦卓三いよく

興に入りぬ、

「やア人殺しども、揃って來たな、さア這入れ、今日の御客様は此二人だけ、腕に糾をかけて御待遇しろよ、しかし乃公の目を忍んで變な處へ不埒な糾をかけ過ぎると此女等、承知しないぞ、たゞ間惚ぐらるなら平生の馴染甲斐だ、大目に見逃してやるかね、は、は、は、」

おもはず振り返りし朝鮮髻と石作、はつと驚く途端に、つるりと絹の座蒲團より迂り落ちて、あはれや半泣きの瘡せつ面、一種の悲鳴をあげぬ、

「たゞ大將、これから我々二人は全體、どうなるんで御坐います、石作さん氣を確實に持つてくれないと困るよ」

柳橋で第一の料理屋に連れ込まれ、生れて始めての珍味佳肴に埋められ、あつと驚く眞正面より、さア喰へ、さア飲めと大浦卓三に責め付けられ、加之も土地の名物藝妓

五人、前後左右を取巻かれ、あらまア此お髻の可愛らしい事と引ッ張られ、おや此お方は俳優に似てるよと捻ねり廻されて、有難いやら苦しいやら實は夢が夢中の石作と朝鮮髻、されど此奴等この中で箸と盃は手を放さず、泣きながら食ひ逃げながら飲む體、いはゞ生命がけの御馳走、地獄と極樂の境目に追ひ込まれし餓鬼の如し、午後の一時過より其日の暮るゝまで、およそ半日の間、息を次ぐ間もなく酒を浴せられ肴を詰め込まれ女に引ッ張り廻されて、綿の如く柔み潰され泥の如く酔ひ潰され、もはや手足も叶はず身體も動けず目も見えず口も喋けず、たゞさへ人間一疋に足らぬ奴が猶更ら四支五官の作用を失ひ、そのまゝ其處に倒れて死人の如くなりぬ、

夜更け人定まりて後、なほ朦朧たる夢うつゝの心地ながら、やうく我に返りて目を見開けば、八軒長屋の塙でもなく、行倒れし往來の路傍でもなく、數奇を極めし一室

に白晝を欺く電燈の下、眩ゆく光る金無地の二枚折に立圍まれ、瓦を綿繻に包みし如

く身は絹夜具に埋もれて、おもはず咽喉の乾きし枕頭に酔醒の水あり、あたり闇として音なく、そつと自己が面の皮を捻ねれば正しく痛い朝鮮髻、恐るゝ首を上ぐれば





我と並びし石作また首を上げて、じろく、訝かしげに此方を打守りぬ、

「石作さん、おい石作さん、たしかに石作さんだらうね」

「さうだよ、石作だよ」

「全體、こゝは何處だね」

「さア、何處だらう」

「拙者、つらく考へるに、こりやア尋常事でないぜ、大浦の大將に連れられて、柳橋の料理屋で、さんざ御馳走になつたまでは覚えてるが、その後の事、さっぱり分らんよ、ねエ石作さん、もし狐狸に遣られてるんぢやなからうか」

「なアに折を提げて出た覚えはないから、大丈夫、狐狸の業ぢやないよ、つまり斯うだね、あの料理屋で前後めちやくに酔ひ潰れて仕舞つた二人の身體を、大將また例の惡洒落で面白半分、どツか近處の待合へでも運び込んだらう、そこは流

石は石作、これでも昔の若旦那だ、あの場合、あんな工合にされた段取から、この室内の様子を見るに萬事の體裁が、きつと待合に相違ないよ、嗚呼、思ひ出せば朝鮮さん、小三十年にもなるがね、絶えず毎夜、かういふ夜具で枕屏風に朝日も知らず寢過ぎた罰が中ツて、今あゝいふ長屋に四年越の膝小僧を抱寝の境涯だ、落ちも落ちたり、察して貰ひたいね、實ア今日の晝間、五人のうち年輩二十二三の意氣な藝妓で、きり、ツと顔の道具の緊ツた、江戸棲を曳いて居た女ね、よく肖てるぜ、その頃この石作を追ひ廻して、殺すとか生かすとか騒いだ女にさ、ありし昔が猶更ら思ひ出すよ」

「おい、石作さん、小三十年も昔の事で變な氣になられては困るよ、お互に今は今だ、どう考へても、これぢやア、あまり一時に運が向き過ぎてるぜ、このまゝ、夜が明けて我々、どうかなりやアしないかね、もし大將が此家に宿つて居ないとすれば、

少々うす氣味が悪いよ、かうなると拙者、よほど君より正直だからね」

「いくら正直だつて朝鮮さん、まさか今夜この勘定を拂へるは無からう、第一また此家が黙つて我々二人を宿める筈はないよ、居るにしろ居ないにしろ萬事は大將の受持さ、つまらない心配したつて今更、どうなるもんかね」

「なるほど、いかにも、さうだね、や、いよくさうと極つた以上、一夜でも大名になつた氣だ、どうだい石作さん、手を鳴らして見ようぢやないか、どんな奴が出て来るか、いづれ女だぜ」

「とんだ正直だね、もし女が來たら、どうする心算だよ」

「女も女によりけりさ、もし女らしい女が來て何とかいへば、拙者また其場の成行で、どうともなつてやるよ、晝間も拙者の髻を引ツ張ツて藝妓どもが嬉しさに、あらまア可愛い事と言つたぜ、しかし左右から寄つて來て一時に五六本も引ン抜か

れた時は、痛かつたね、ひりくしたよ、だが女といふもの、ふしぎに腹の立たないもんだね、は、は、は」

「それで此方の小三十年と差引が濟んだぜ、は、は、は」

「眞實だ、ところで石作さん、腹さんさ食ふものは食つたし飲むものは飲んだし、そのまゝ酔つて前後も知らず、ふと目を開いて見れば、この座敷で絹夜具に包まれた工合、堪らないね、宜い心持だね、どう考へても拙者、いよく貧乏は嫌になつたよ、夜が明けて、また元の巢へ歸るかと思へば、なさけないよ」

「いくら此方が嫌になつても貧乏の方で嫌になつてくれないから困るよ、なさけなくツても、元の古巢へ歸らなきやア何處へ歸るんだ、いつまで此ま、此家に居れるかね」

「時に石作さん、何か生命に別條のない毒は無からうか、たとひ拙者、少々の苦しい

病人になつても此まゝ五六日こゝに寝て居たいよ、起きて達者に元の巢へ歸りたくないよ、實ア平生に食ひ馴れないものを一時に押し込んで食つたから、腹の蟲め俄に驚いて、どうかなるかと思つて居たに、かう無事で心持が宜くツちやア聊か手違ひだ」

「ぢやア二人とも揃つて、夜の曉方に虚病でも起さうか」

「いや、いけない、悪洒落はしても根に親切氣のある大將、すぐに醫者を呼ぶから無効だよ」

「おい朝鮮さん、ぐづく言つてる間に夜が明けて來たぜ、そら、鴉の啼聲が聞え出したよ」

「いよく啼き出しやアがツたね、加之も今朝ア、いやに大きい聲だ、せめて石作さん、あれを戀の怨恨にでも聞きたいもんだなア」

たとひ病み煩つても此まゝ此處に寝て居たい、のこく起きて達者に歸りたくないといへど、このまゝ此處には居れぬ奴、置けぬ奴、いよく元の古巢へ逆戻りの運命に迫られて、からりと夜は明け放れぬ、

されど大浦卓三が萬事一切の引受に、わけて多年の恩顧を蒙る待合稼業、いやくなから流石また乞食待遇もせられず、つまりは襤褸に包んだ金と思つて、まづ朝の膳部に迎ひ酒を出せば、石作と朝鮮髻と二人、これぞ現世の食ひ終め飲み終め、もはや生きて再び來られぬところと心得、恥辱も外聞もなく目を白黒にして腹の皮の裂けるまで詰め込みぬ、

給仕の女は始めの義理一片に運びしだけの事、飯も酒も其まゝ其處に置いて遁け出せば四邊に人なき僥倖の二人、そつと互に聲を潜めぬ、

「朝鮮さん、どうだい、もう這入らないかね、みすくゝまだ御馳走が、この通り残ッ

てるぜ」

「や、残念ながら、いけないよ、もう拙者この上は堪忍にも詰め込めないよ、實ア苦しいよ」

「苦しい、しかし歩けるだらう」

「慌て、歩けば出るかも知れないが、なアに、そつと動けば、どうか斯うか動けさうだよ」

「折角、食ったものを慌て、出すには及ばないよ、なるべく腹に響かないやうに五體を宙に浮かして、ふわ〜と歩けば宜いから、もう少し詰め込めないか、餓死はあるが食ひ過ぎて死んだ奴ア、あまり聞かないからね」

「いや随分、死物狂ひで詰め込んだがね、なるほど現在これを此ま、見残して行くなア心外だ、第一また勿體ないよ、折を貰はうか」

「無効だ、どう思ったか女中め先刻、小さな聲で問はず語りに、朝ッばらから折は出しませんと吐したぜ」

「けしからん女だな、この我々を見くびって先を越しやアがッたんだよ、さう吐せば意地だ、汁氣のないものア一切その漬菜まで袂へ入れてやらうか」

「意地でなくツても捨て、置けない、汁氣があつても手で絞れば大丈夫だ、猫が舐めたやうに入れて仕舞へ、入れたり入れたり、さア早く」

「心得た、寶の山だ、手を空しうして歸れるか、石作さん、この漬菜は本場の三河島だぜ、うまいよ、ついでに盃も入れてやれ、一個、幾何するだらう、皿も二三枚、差支なからうね」

「文句をいはずに、黙ッて、黙ッて、無言の早業に限るよ」  
折しも障子越に顔も出さぬ女中の聲、

「お俵が二臺まゐりましたよ、もう九時で御坐いますよ、お急ぎ立て申す理由では御坐いませんが、手前ども毎日十時から掃除を致しますので、いづれ其うち、また御ゆるりと、これを御縁に相變らず、どうか御最良を願ひます、お邸宅は本所の業平町ださうで御坐いますねエ」

何といはれても笑はれても、もはや、食ふだけ食ひ飲むだけ飲んで、餘った食物は二人の袂へ詰め込んだ朝鮮髻と石作、俵二臺と聞いて此奴また俄に元氣付きぬ、

「朝鮮さん、俵が來てるとよ」

「有難いね、ここの女等ア癪に障るが大將の思召は行届いたもんだ」

生來こゝに始めての華奢全盛、空前絶後の御馳走に逢ひしが、あはれや槿花一朝の夢さめて、また元の古巢に立歸りし石作と朝鮮髻、ほつと思はず溜息を漏らしながら、

たゞ茫として氣脱けの如くなりぬ、

「石作さん、有難いは有難かつたが、これぢやア極樂と地獄の變り目が、あまり際立つて早過ぎるぢやアないか、加之も娛樂は僅一晝夜で、これから前途の月日が長からなア」

「眞實だ、めぐる浮世の小車といふが、かう榮枯盛衰の理が眼前に來てくれぢやア、却つて後が苦しいよ、いくら小車だつて、もう少し朝鮮さん、ゆるくと廻つてくれさうなものだね」

「しかし石作さん、その一晝夜が、何とも、彼とも、いへなかつたぜ、今更ら急に氣の付いた理由でもないが、何故こんな長屋へ住んだらう、見れば見るほど、うす汚い家だなア」

「だから後が困るんだよ、あの御馳走の味と藝妓の愛敬と絹夜具の寢心地を、すつか

り忘れ切るまでは朝鮮さん、お互に猶更ら苦しいぜ」

「をりく夢にでも見て、くりかへしたいもんだね」

「藝妓に酌をさして心持よく酔った邊だけなら宜いが、あの勘定を此方に取りに來られて、ぎゆうく責め抜かれる夢なんか、感心しないよ」

「いや石作さん、それでも結構だ、實ア拙者、この年齢になるが、いつも立食の現金拂ひで、藝妓や料理屋の勘定を後から取りに來られた覚えがないよ、どんな氣持か一度、見たいね、は、は、は」

折しも不意に飛び込み來りしは例の熊さん、目を怒らして吐鳴り立てぬ、

「おや、此奴等、罰も當らねエで無事に戻ってるな、生憎この乃公が居なかつたから仕方もねエが、何故また來るなら來るで、そつと乃公を尋ねて來ねエんだ、のこのこと晝日中お店の眞正面へ二人揃つて畜生、おまけに旦那が蒼蠅く思召して連れて

出りやア、好い氣になつて、時も場所も考へねエ奴等だ、さんざ瘦せツ腹へ喰ひ酔つて、へれけになつた上また待合へ宿り込んだといふぢやアねエか、よくまア其状態で、づうくしく寢やアがツたな、え、おい、旦那ア笑ひながら面白いと仰しやるが、後で聞いた乃公ア店の衆の手前、どんなに辛いと思つてるい、穴へでも這入りたかつたぞ畜生、うぬが分際も考へずに、ふざけ過ぎた奴等だ、立ん坊の一件の迷惑をかけて、まだ七日と立たねエぢやアねエか」

二人とも今更ら一縮みに縮み上りて、青くなりながら石作まづ口を出しぬ、

「く、熊さん、熊さん、實に相濟まん理由だ、決して熊さん、さういふ料簡でないが、おい、朝鮮さん、こゝで何とかいはないかね」

朝鮮髻また俄に狼狽へ出しぬ、

「なるほど、熊さんのいふところ、いかにも道理だ、なるほど、こりやア我々に於て

一言ないよ」

熊公、怒りながらも心に優しい男、はつと壁越に気が付いて聲を潜めぬ、

「なるほどくつツて、何が道理だい、實ア今、別に旦那の用があつたから其待合へ寄ツて来たんだぞ、すると家中の大評判だ、今朝の迎ひ酒も宜いが、食ひ餘りの雑物と同時に皿や小鉢まで袂へ入れて歸つたといふぢやアねエか、この盗賊め、さア出せ」

「出すよ、出すよ、拙者の分は明白に出すが、石作さん君の分も吐き出さないかね、拙者一人のやうに思はれては甚だ人體に關はるよ」

めくら蛇に怯ぢず、いかなる人間に對うても、痛い目するまでは屁理窟を並べ出す奴なれど、この熊さんに怒られては忽ち青菜に鹽の石作と朝鮮髻、ぐうの音も出さず凹垂れぬ、

熊公、壁越の隣屋に憚りながら、さらに胡坐の膝を叩いて目を剥き出しぬ、

「揃ひも揃つた奴等だぜ、え、さのみ悪氣も無からうが、をりく〜とんでもねエ横着氣を出しやアがツて、また罪も智慧もないくせに慾があるから猶更ら困るんだ、考へて見ろ、料理屋や待合の皿小鉢を袂へ入れてね、それが其時の洒落で濟む人ア別にあるんだ、飢饉年の半亡者を引摺り出したやうな薄汚ねエ瘦せツこけた貧乏面で盗賊の外、何と辯解が立つんだい、よくまアづう〜しく大膽に、こんな大きい皿を盗んで来やアがツたな、餘計な事に小器用な奴等だ」

「だから熊さん、二人とも悪かつたよ、この通り謝つてるよ、この通り預かつて来た品物を正直に出してるぢやアないか、ねエ石作さん」

「どうか熊さん、かういふ事は熊さんだけにして貰つて、大將へは内々に」  
「は、は、は、まだ口の減らねエ、預かつて来たと吐すよ、誰が汝に預けた、何が正直だ、

第一また大將へ内々といふが、乃公より大將の方が先へ御存じだぞ、歸ると直接、待合から笑ひ半分に電話が掛つてらい畜生」

「や、これは大變、大將に知れたかね、どうしよう石作さん、二人とも折角の信用が無くなるよ」

「信用、おい、おい、乃公の前だから宜いが、も少し自己の分際と相手の御人品を見て物をいふもんだ、二人とも折角の信用が無くなるって、なくなる信用が二人とも、ある料簡、またあの大将が汝達に全體、どういふ理由で何を御信用なさるんだ、實は今日、汝達の身につけて夢のやうな幸福を持って来てやつたんだが、さういふ料簡で居やアがツちやア、この乃公が大将へ濟まねエから、そつと此ま、持つて歸つて、きつぱり御謝絶をして仕舞はう」

「えッ、熊さん、二人の身に取つて夢のやうな幸福、く、熊さん、後生だよ熊さん、

持つて歸らずに置いて往つて貰ひたい、せめて半分だけ、あとで兩断にするよ」

「ぢやア以後、もし今のやうな料簡で居やアがると承知しねエぞ、まア兎も角も京橋の方を向いて有難く拜め、冥加に餘つた奴等だぜ、實ア斯うだ、近頃、大森へ大將の御別荘が出来たんだ、ね、ところで汝達二人を、どう思召したか、かはいさうだから、その別荘へ置いてやらうと仰しやるんだ、つまり食つて着せて廣々とした立派な新建築の別荘で飼ひ殺しにしてやらうと仰しやるんだ、暇に明して庭の草でも撈りやア宜いんだ、その代り二人へ言ひ渡す事があるせ、まづ汝は其ほしやく、髻を剃つて仕舞つて今後一切、どんな事があつても易に曰くを持ち出さない條件付だ、また汝は今後一切、誰に向つても彼是めいた千三口調を出さないといふ條件付だが、二人とも、どうだ」

聞くや否、石作と朝鮮髻の二人、もはや物も得言はず、たゞ啞の如く黙つて兩手を合



しぬ、



あはれや立ン坊の手取山は、八卦よい屋の智慧を借りしがため、汽車に跳ね飛ばされ  
て九死一生の大怪我、何の因果か元の古業にも戻り得ず、せめて大浦卓三より餘所な

がら贈られし金を現世の見終めに、いよく三日目の曉の鐘を現世の聴き終めに、そ  
のまゝ出る息を引取りしが、それ以来の石作と朝鮮髯は此奴また案外の幸福、夢のや  
うな事が引き續きしのみか、種の善い狎ころの如く大森の別荘へ飼ひ殺しとは、やは  
り正直一途の熊さん、縁を繋ぎし滾れ僥倖、二人おもはず互に顔を見合して、あまり  
の嬉しさに雙方より頬ツ邊へ喰ひ付きぬ、  
そもく八軒長屋の開闢以来、いつも何事によらず飛び出して失策ツた此二人が、い  
よくこゝに最後の運を拾うて目出たく人間の捨場所を這ひ出しぬ、

朝鮮髯と石作を送る文

浪六こゝに謹んで満腔の熱誠を捧げつゝ、八卦屋君と千三屋君を送る、  
そもく、兩君の出處経歴、いかなる父母の系統より生れて、いかなる世間の風波

に流れ来りしか知らねど、この本所の業平町に八軒長屋の建設以來、今日に至るまで四年越の御苦勞千萬、殆ど感謝の辭なきに苦しむ、

夜なく浅草の宵闇に神易の弓張提灯を照らし、日々いづこへか蚊の脛を飛ばし、  
 的なき家庫地面の周旋に駈け廻り、歸れば忽ち一蓮托生の徒輩に接して、いつ  
 も頭の上りし事なく、或は不意の喧嘩を仕かけられ、或は無實の冤罪を蒙り、或  
 は繼子の如く窘められ、或は穢多の如く侮られ、さらぬも痛々しき瘦せツ面を無  
 遠慮に引ッ搔かれし事あり、おもはず二人抱き合せて腰を抜かすほどの目に逢ひ  
 し事あり、されど兩君の無邪氣にして至極お人よしに出来たる工合、敢てこれを  
 根に持たず、また直ぐに忘れて其相手に翻弄されながら、ますく本氣の沙汰に  
 出酒張ツて黄色の大聲を振り立てつ、常に八軒長屋を賑はし來りし頓狂さ、實に  
 一日も缺くべからざる名物なり、

その名物として久しく馴染の深かりし兩君が今や將に去らんとす、情緒纏綿、う  
 た、離別の涙に堪へざれど、こゝに此ま、引止めて置いては餓死さすより外に藝  
 のない兩君、その最後を見るに忍びず、殊更ら惜しき名残を割いて無理に其首途  
 を喜び送る、

別れに臨み送るに際して、ちよいと何をがな餞別に差上けんと存ぜしが、別段こ  
 れといふ品物もなければ、この事のあるを豫期せし一日前、だしぬけに柳橋の酒  
 池肉林、また藝妓まで添へての御馳走、あれは實のところ大浦氏の奢にあらず、  
 豫てより兩君の勞を多とせる浪六の奢なり、

あゝ今日まで浪六のため八軒長屋に盡されたる八卦屋君と千三屋君、今後の兩君  
 に呈すべき一の婆心あり、願はくは一時に安心し過ぎて病氣となる勿れ、また一  
 時に食ひ過ぎて頓死する勿れ、なるべく身を大切に養生して、幸に天の壽命を保

ち自然の往生を遂げし後は浪六その墓を營み其碑に銘すべし、着て食ふに困らず死して墓の約束まで出来るとは、おもひの外に兩君また晩年の幸運ならずや、

浪 六

八卦屋君  
千三屋君

八卦よい屋の朝鮮髻と千三屋の石作、こゝに此文を得て猶更の拵舞雀躍、いよく跳ね返りながら八軒長屋を立出でつゝ、大森の別荘へ飼ひ殺されに行きぬ、

糞壺の蛆蟲と一般、なくて叶はぬ自然の約束に生れて、この八軒長屋に生涯の運命を托せし筈の石作と朝鮮髻が、案外の浮世へ拾ひ取られしと聞かや否、實は負け惜しみ

と羨ましさを癪癪まぎれに黙って居れぬ贅六太夫、第一番に喚き散らしぬ、

「さア、をかした事が出来たぞ、この長屋で床板の腐るのが早い、人間の干物になるのが早いかと思つて居たに、床板の腐らんうちに彼奴等二人、無事に生きて出居つたわい、しかし考へて見ると、こりや間違ひぢや、あのまゝ二人とも干物になつてこそ、書畫骨董に飽いた世の中の好奇心な奴が、別荘の置物にもするであらうが、全體あの二人、ひよこくゝ生きて居て何處に面白味も價値もあるもんかいな、かはいさうに彼奴等、福の神に拾はれた氣で滅多無性に躍りながら出て行き居つたが、事に依ると生肝を抜かれるかも知れんわい、やはり人間は人間相應、この長屋で尋常に餓死でもしくされば我々また馴染甲斐に何とか、死後始末を付けてやつたに、なア半助はん、おツと禁物ぢや、その隣屋の井上はんや、此奴も不在かい、向側の富田はん、どうでおますい、前夜から今朝へかけて、ねツからトンと音も聞きまへ

ンな、また妙に何を考へて居なはる、手取山の一件に懲りて以後一切この長屋で智慧の借貸は出来まへンが、貴君も近來は冴えンなア」

誰をか相手に引出さんとすれど、よくよく氣の向いた時でなくば長屋中この贅六に應ずるもの無く、たゞ筋向ふの宗玄坊、今しも托鉢に出かけの用意、がちやくくと禪杖やら鐵鉢やら商賣道具を取揃へる物音、き、濟ました贅六また此奴に喰ひ付きぬ、

「宗玄はン、どうぢやいな、そろそろまた今日も例の飛花落葉で風に隨うて出かけなはる工合ぢやが、この頃は鐵鉢の中へ物が這入りますかな」

贅六に誘ひ出されし宗玄ならねど、今しも市中の托鉢に出かけの用意、はや禪杖と鐵鉢と網代の丸笠を取揃へて破れ衣に鼠の脚絆、草鞋の紐を結びながら、實は昨日より飢ゑたる眼球を額越に光らしぬ、

「いつも相變らず獨りで喧しい上方だな、しかし如是我聞あの八卦屋と千三屋が乾物

にもならず無事に生きて出たとすれば、この宗玄また坐禪ばかり組んで居れンわい、衆生濟度のため、そろそろ出かけよう」

いかに喚き散らしても長屋中に相手なき贅六太夫、これ幸ひの的に取って俄の大口を開けながら、げらくと笑ひ出しぬ、

「そろそろ出かけても、慌て、駈け出しても、そりや勝手ぢやが宗玄はン、衆生濟度のためは少々、聞き辛いな、は、は、は、釋迦や達磨は知らン事、末世の身で、あほらしい、あかの他人の衆生を濟度するより御本尊の鐵鉢一個が大事ぢや、からくく喝の空で持つて歸らぬやう、なるべく大氣根に貫ひ歩いて來なはれ、立ン坊の手取山は横になつて折れくさつたし、あの朝鮮髻と石作が出て失せた以上、この長屋で外を稼ぐのは宗玄はン、貴君と私との二人ぢやがな、あとは皆あの蒲鉾のやうに床板を放れる事の出来ン奴等で、同じ外へ出るにしても髻目鏡の古洋服、出れば其のま

ま動きの取れん會社の職工で、市中を自由自在に稼ぎ歩く我々の仲間へ這入らんわ  
い、なア宗立はン」

「は、は、は、三世不可得、自他無差別、この長屋を出るものも出ないものも回光返照で  
一味平等だ、さう言葉に無妙魔界の角を立て、は宜しくない、人間萬事無念無想到  
して始めて六塵の中に安住し得らるゝ事を悟らねばならン」

「ぢやらくと、措いてンかいな宗立はン、外の奴は兎も角、この私に抹香臭い白痴  
恐喝の受賣文句は入らんわい、は、は、は、腐れ經文の端くれを聞き覺えに嚙り出すよ  
り一時も早う方角の知れた娑婆へ飛び出して、今いふ通り鼻の下を稼ぎなはれ、人  
間萬事無念無想到が錢になるかい、人間萬事塞翁の馬の糞でも拾うたが勝ちや、は、  
は、は、」

「や、いかに心易い交際でも、白癡恐喝の受賣文句とは、聊か聞捨てにならんぞ、腐  
れ經文の端くれを嚙つたとは猶更ら以て怪しからン、そもく我禪道は經文も學問  
も用のない教外別傳の不立文字だ、修多羅の教は月をさす指の如し、既に門を入れ  
ば瓦を提けて何かせん」

「何ぢや、瓦を提けて何かする、さア何とでもして見くされ、それこそ心易いが此ま  
ま聞捨てにならんぞ、全體また一味平等ぢやの自他無差別ぢやのと吐す汝が、いつ  
も隣家の色情學者と摺み合の喧嘩しくさって、この私に今更ら諫言がましい言葉に  
角を立てるのは、怪しからンの上に飛び出た奴ぢや」

損が無くて隙さへあれば誰でも彼でも敵手に取る贅六の勢ひ、うかく例の術にか、  
ツた南無三と後も見返らす遁け出す宗立坊、また入口の瘡毒お六に不意の關所を築か  
れぬ、

「あら、ちよいと宗坊さん、お依頼があるんだよ」

流石の大自然も忽ち其まゝに立往生、わざと俄に網代の丸笠を戴きつゝ急ぎ足に振り返りぬ、

「あの上方に妨げられて今朝は案外、遅くなつた、刹那も六度萬行、時に何か、急の用でもありませんかな」

いつもながら、見れば見るほど持つて生れし花の顔面を、惜しや浮世の嵐に吹きぬかれた風穴、亂れし結び髪を蒼蠅さけに搔きあけて、幾何の男を沈めしか片頬の笑渦に猶更ら物凄じ瘡毒お六、

「宗立さん、また出がけを止めて済みませんがね、今日も妾が持つた男の命日ですよ、加之も只、死んだのでなく、さんざ迷はしぬいた結句の果に、よくない業をしましたからね、いはゞ妾が手を下して殺したも同じ男で、猶更ら寢覺が悪いですよ、思ひ出せば、幾何か罪が亡びませう、弔つてやつて下さいな」

「や、またかい、さう数が多くつては困る、いちく面倒だ、そのうち閑暇のある時、かためて一度に」

「ですがね、過日お頼み申したのは妾が心底から惚れた男で、今日の命日に當る佛は今いふ通り、考へると氣持の善くない事をして、あの世へ無理に追ひ送つた男ですからね、是非とも此二人だけは、別に弔つて貰ひたいんですよ、なアに後の有藏無藏は、此方へ逆念物の一唱も取戻して宜い奴等さ、しかし宗立さん、嫌なら嫌で宜しいよ」

まだ残る色氣の目元に一種の凄味を帯びて、聊か鼻にかゝりし聲もろとも、じろりと額越に睨まれし宗立坊、

「何、決して、いや、といふではない、本地法身、慈悲善根、さらば其人のため八萬四千の法門を縮めて無上の一偈を與へようかな」

「法華ですよ」

「法華、法華は、過日の男ぢやアないか」

「ありやア互に好き合ツた情人だから、實は禪宗でも法華でも端唄でも何でも妾の念さへ届きやア浮びますがね、今日の佛は大變な固法華で、これを嬉しく往生さした理由ぢやアないンでせう、だから猶更ら外の宗旨は、いけませんよ、是非とも交りツ氣のない法華で、やツて下さいな」

「こりやア困ツた、さうなると甚た迷惑至極だ、全體あの日蓮宗では四個の格言中、禪天魔と言ツてね、我祖道を惡口罵詈の謗法に陥れた宗門だよ、殆ど火と水だ、いくら何でも今更ら俄に、太鼓は叩けないよ」

「叩けない、叩けなきやア叩けないで、無理に叩いてくれたア頼みませんよ、誰が頼むモンか、木にしろ藁にしろ頭を丸めて法衣を纏ツてるから、犬猫の泣聲より少し

やア殊勝だと思ツて、ちよいと時の間に合せに頼んでやツたんだ、それに何だと、宗旨が違ツてる、ほ、ほ、ほそりやア立派な寺でも持つてる坊さんのいふこツた、今この長屋で火も水もあるモンか、ふざけた乞食坊主だよ、腐ツた鱈の腸でもあツた時、取ツて置いてあけるからね、それを樂しみに早く出て行くが宜い、用もない面前で、ぐづくして居られちやア目觸りだよ」

瘡毒お六のため一息に吹き飛ばされて、この時ばかりは實際の飛花落葉、風に隨つて遁け出せし宗立坊の後より、のこく運わるく出て來たは奥の院の色情學者、ちかごろ自己は此長屋の九尺一間にさへ満足に住み兼ねて居ながら、まだ懲りもせず人間萬事を生殖機能の一局に捻ぢ込まんとする例の富田剛太郎、

「おや色情の書生さん、ちよいと聞きたい事が、あるンだよ」

この瘡毒お六には一度、あの石作と朝鮮髻の塙へ吐鳴り込みし時、不意に背後より咬へ

て振られし事のある色情學者、おちはず面を皺めて立停りぬ、

「僕に何か用かね」

「別に何も大した用は無いですかね、まアお掛けなさいよ、實は此二三日、マツチの内職が切れ目だから、暇で困ッてるんですよ」

「いや、其方は暇でも此方は少々、急ぐ用があつて今、出かけるところだ」

「だって、宜いぢやアありませんか、さう野暮に悪固く、今日に限ッて急がないでも、事は足りますよ」

「僕は急がないと用の缺ける事があるんだ、もし何か談話があれば此方も暇のある時、ゆるく話さう」

「ですがね、かういふ長屋に住んで其日に追ひ廻される人間が、さう兩方に都合よく暇のないんですよ、妾の暇の時に交際ッて貰へば、また汝さんの暇な時に手を空

けてでも交際ッてあげますよ、それも世間に對して、恥づかしくない眞面目な學問でもする尋常の書生さんなら知らない事、よし出来ないにしろ、青ツほいにしろ、聞けば色情の端くれを口にする書生さんが、それぢやア困るよ、第一この妾なんかの面を黙ッて平氣に通れない筈だよ、修行のため蒼繩く出て来て、無理にでも教へてくれといふのが正當だ、どう間違ッたか、假にも警察へ一夜、それで止められた人ぢやアないかね、正直にいへば狎が噓をしたやうな顔の雜作で、よほど女縁に遠い鑄型だがね、あアに女は時と場合の對等物だから、根氣よく氣長に覘へば一人や半分ぐらゐる出来ないとも限らないよ、しかし性の知れた筋の立ッた女らしい女といへば、とても汝さんのやうな人種ぢやア無効だ、幸ひ妾が祕傳を教へて上げよう、味方の男と違ッて、敵になる女も女、さんざ戰ッて來た敵の女の妾が、内々そツと謀策を漏らすんだからね、これこそ汝さん、キツと出来る理由だよ、同じ長屋の情



「誼に、無價で教へて上げよう」

苟くも吾人類の元始生物以來、に避くべからざる自然の約束と共に傳へ來れる靈妙神祕の一局として、その一局に人事一切の本能を遺憾なく歸納せしめんとする色情學者、いは、生理上の道德學者を以て任ずる空前絶後の富田剛太郎が、交尾期の付いた犬の如く女の尻を追ひ廻す色情狂と見られしのみか、人間の肩にも數へられる瘡毒の口より嚙んで吐き出す如くに扱はれて、もはや堪らず、くわツと満面に朱を注ぎながら眞ツ白の眼球を剥き出しぬ、

されど瘡毒お六は、どこを風を吹くかといふ風情、平氣に濟ましたものなり、

「おや、この人は變だね、急に妙な顔を仕出すよ、そりやア嬉しいのかい、怒ッてるのかい」

「おい、こら、醜の醜、それ以上に人間の恥辱を曝し得られない醜劣の極點を印した

女だから、もとより取るに足らず齒牙には掛けて居らんが、全體この僕を何と心得てる、苟くも吾人類の生理上より自然の本能を發揮すると共に新なる一の道德を實行せしめんとする僕だぞ、その僕に對つて、交尾期の付いた犬のやうに女の尻を追ひ廻せとは言語道斷、怪しからん事を吐す瘡毒だ」

瘡毒といはれて思はず、身を隠す女でなし、これ見てくれといはぬばかりの顔面、ぬツと突き出しぬ、

「おや、この豆穀め、生意氣な事、ばちくくと弾け出すよ」

「何、豆穀だ」

「狎が噓をしたやうだと言つたのはね、お世辭だよ、軽くツて實のない豆穀野郎で澤山だ、その豆穀に火が喰ッ付いたやうに、いくら汝さんが其處で赤くなつても、ばちばち音ばかりさしたツて、無効だよ、ほ、ほ、けしからんも、あまからんも、あツ

たもんか、言語道断より、そんじよ其所等で呆れの宙返りだ、五六年も修行してから出直して来るが宜い、まだ妾の前で真正面に向いて来られる人間ぢやアないよ」

「人間でない、汝ア何だ」

「瘡ッ毒さ、武士の向疵さ、すきな道で卑怯未練もなく、敵といふ敵を引受けてね、さんざ浮世に戦つて来た金看板だ、棒を呑んだやうに突ツ立ツたまゝ見物すると罰が當るよ、これ豆殻さん、よく聞きなさい、人間といふものア神様でも佛様でもないからね、どツかに缺點がなくツちやア、ならないもんだ、たゞ目に見えるか見えないかといふだけの事さ、まして天ぷら鍍金の流行る今の世の中は上ツ皮の面ばかり立派で、夏の田舎鯖より臍の腐ツた奴が多いよ、男も女も此ごろの馬車や俵で飛ばす人間を丸裸にして、お醫者と金の力を取ツて見なさい、どこに満足な身體があるもんか、それとは反對で、この妾なんかア落ちてても枯れても自慢ぢやアないが、

この通り人の目に付く顔へ祕さず包ます天下晴れて正直に三個所の疵を現はした外、憚りながら五體に兎の毛で突いた痕もない女だ、もし吹き出た瘡毒が恥辱なら、これを無理に押へて吹き出さない瘡毒は猶更ら恥辱だ、悪い事をして監獄へ行く奴、此上もない正直だよ、監獄へも行かずに悪い事をする奴ア生涯そのまゝ罪の亡びない大盜賊の詐欺師だ、加之も豆殻さん、瘡毒も瘡毒に依りけりで、妾の瘡毒ア世間の淫賣や娼婦と違ひ、自分の氣に染まな嫌な男に色を賣ツて、錢を取ツて来た慾の凝結物ぢやアないよ、話せば長いが、つまり金と勤めの外で、いはゞ戀と情の筋道に、あらゆる剛敵と引ツ組んだ記念の手疵さ、汝さんの色情とかいふ事は全體、どんな團子細工を食ひ過ぎて放り出した屁理窟か知らないが、まだ此道にかけては青ッほい、雑兵葉武者の影も踏めない分際で、妾の瘡毒に對ツて口を開くのは恐れ多いよ、土下坐でもして拜みなさい」

瘡毒お六のために饒舌りまくられて、流石の色情學者も例の一局を持ち出す勢ひなく、たゞ茫として思はず歎聲を漏らしぬ、

「醜の醜なる無教育の劣等動物も、こゝに至つては殆ど遺憾なく其極に達せりと謂ひつべしだ、もはや人類中の語を以て對すべき程度でない」

泣くが如く泣くが如く恨むが如く訴ふるが如く、自己みづから自己に語つて首肯しながら、飄然として長屋を立出でし後姿、實は二三日以前より九尺一間の落城に近づいて、まだ飢死に間はあれど其日の旦夕に迫れる富田剛太郎、ひよろくと猶更ら影すし、

瘡毒お六、冷かに其後姿を見送りながら、長煙管に粉莢を詰め込みつゝ手許に残るマツチの火を摺り付けて、ぱつと破障子の外へ煙を輪に吹き出しぬ、

「かはいさうにねエ、まさか生來の素馬鹿でも無いだらうが、どういふ拍子に間違ッ

て、あゝいふ人間に出来たらう、やはり一種の病的かね、親類でも縁者でもないが、同じ長屋に住んでる以上、あの病的を癒してやりたいと思つて、わざと小ッ酷く氣の付くやうにコキ卸して見たが、無効らしいよ、瘦せて居ても骨組は丈夫だし年齢は若し、どうせ器用な事は出来ないにしろ人間相應、つまらない屁理窟を止めて泥溝浚滌か、犬殺にでもなれば宜いものを、何といふ不料簡な奴だらう、あれで食ふや食はずに色情の學問とは凄まじいよ、一度、どツかの淫賣か茶屋女を相手に無理情死でも仕損つたら、目が覺めるかも知れないが、まア當分あのまゝぢやア焼き直す方も工夫もないねエ」

串削りの半助老爺、ひよこりと例の鳶鼻を蠢めかして、掬ひ願の馬面を突き出しぬ、「お六さん、いち／＼出る奴を喰ひ止めて豪氣な威勢だね、とんだ富樫の女左衛門が關守になつたよ、はゝゝゝ」

「おや、親方、實ア二三日マツチの内職が切れ目ですからね、たゞ手を空けて、ほんやりしてるのも變だし、ちよいと保養がてらに慰み半分、ふざけてるンですよ、わる甘くって聞き辛いところは、耳を塞いで居て下さいよ」

「どうして、甘えどころか、ぴりりと辛く澁く乙に出来てるよ、托鉢坊主も坊主だツたが今の青二歳を豆殻野郎は、よかつたね、は、は、その調子で一件、どうだい、わツしの隣屋に巢をくツてる上方種の掠鳥を追ひ出すからね、羽翼の毛でも撈ツて見なせエ」

きくや否、贅六また壁越に吐鳴り立てぬ、

「な、何ぢや、上方種の掠鳥、鳶の隣屋に掠鳥は縁がないでもないが、日本一の淨瑠璃太夫を掠鳥とは汝まア、よう吐した、これ幸ひに今日といふ今日こそ平生の總勘定、きツぱりと差引してやるぞ、しかし其前お六はんに一言いうて置くが、瘡毒の

薬には掠鳥の毛より鳶の糞が效能あるさうぢやわい、へ、へ、へ」

串削りの半助老爺、ますく、鳶鼻を蠢めかして壁越の喧嘩面、隣屋の贅六また掠鳥といはれて其ま、治らぬ奴、をりしも瘡毒お六の外、長屋中一體の不在なり、

「さア贅六、覺悟しろ、いつも柳の下に鰯の居ねエといふなア此こツた、平生は近所合壁の義理で、無理にも堪忍してやツたが、いよく今日こそ一騎打だ、血嘔吐の出るまで叩き合ツても組み合ツても止め手はねエンだからな、お互に安心して遣らうぜ、かう長屋中が揃ツて出る事ア珍らしいよ、ねエお六さん、喧嘩半途で茶漬飯を食ふ上方流と違ツて、江戸ツ子の早業だ、どうせ忽然、どツちか息の根が止まる結果だからね、迷惑だらうが後の證據人に見物して居て貰ひてエよ、さア掠鳥、出ろい」

瘡毒お六、また悠々と粉苳の煙を輪に吹き續けながら、その長煙管の雁首を音高く破

障子の角に叩きつゝ、くの字形の身を捻つて首を突き出しぬ、

「親方、およしよ、そんな掠鳥一羽、とツちめたツて仕方がないさ、やはり其まゝ、廿處で放し飼ひにして置く方が面白いよ、をりくゝ妙な状態で羽ばたきたり、また變な聲で囀つたり、結句をかしくツて慰みになるからね、當分まア助けてやるさ、なアに入らなくなりやア、いつでも捻つて掴み出せるぢやアないかね」

「ぢやア今日のところ、まア助けてやらうよ、掠鳥、ありがたく思へ、しかし二度と再び許さねエから、その覺悟で居ろよ、はゝゝゝ流石に驚きやアがツたと見えて、ぐうとも、すうとも吐さねエ」

贅六、さらに急かす慌てず狼狽へず、こゝもと例の水飴一流、ねちくゝねンばりと饒舌り出しぬ、

「數のない手品師の種と一般で、それだけかいな、もう、それだけで二人とも、あと

へ残る文句は無いかな、もし萬一、まだあるといへば、日が長い、わけて私は日中に用のない身體ぢや、ゆるくゝ聞いてやるぞ」

「なゝ何だと、この獸類め、ふざけ過ぎて後悔するな」

「はゝゝゝ雀は海中へ入ッて蛤になると聞いたが、この長屋の掠鳥が急に獸物になつたわい、はゝゝゝしかしながら、これまア、いかに口は汝の口で勝手に聲が出るにせい、日本一の淨瑠璃太夫を掠鳥ぢやの獸類ぢやのと、ようも吐した、さア上方もんは喧嘩半途で茶漬飯を食ふか食はンか、また江戸ツ子といふ人間が、どれほどの早業か、注文通り息の根の止まるまで、やらかして見よう、お六はン、はンぢやない、お六さん、迷惑ながら後の證據人に瘡毒の膏藥でも張り替へて、とツくり見物して居なはれや、おツと、どツこい、見物して居て貰ひてエよ、はゝゝゝ」

口ばかりかと思へば、この贅六、のこゝと自己が塙より立出でぬ、

「さア出て来い、出くされ、南無阿彌陀佛、念佛の一唱も先へ稱へて置いてやらうわ  
い」

串削りの半助老爺と瘡毒お六の二人を敵手に取って、例の口ばかりかと思ひの外、俄に自己が塹を飛び出しながら、袖を巻き上げて錢にもならぬ事に腕を叩く贅六太夫、いかにも平生の上方根性に不似合なれど、實は地の利を考へての業、もし叶はずば其まゝ長屋の外へ逃げ出す覺悟なり、

「さア出たぞ、長屋中一體の不在で止め手のないは其方より此方の幸ひ、喧嘩の張合があつて猶更ら面白いわい、常平生は兎も角、かういふ時に汝、この筋鐵入の腕を見せてやるンぢや、藝と女子で上方を責め落されて来た色男といへば、定めて金と力がないと思つて居らうが、金は名人に不用と心得て今日まで、いや、此後も作ら  
ンぞ、しかし持つて生れた力は自然と身に付いて捨てやうが無い、その力を汝

びツくりするな、現に今こゝで出してやるンぢや、へゝゝ五斗俵を手鞠に取つて来た男と知らンか、さア串削りも瘡毒も出て来い、出くされ、この世の引導を渡し  
てくれる」

叫びながら俄に氣が付いて、そツと商賣道具の三味線を入口まで持ち出し、いざとなれば荷いで遁け出す算段、もはや後に心の残る品は塵一本もなし、

「まだ出くさらんな、はゝア、この猛威に恐れて五體が居縮んだと見えるわい、いや、道理ぢや、無理でない、さうあるべき筈ぢや、かりそめにも日本一の淨瑠璃太夫、いよく本氣になつた上は、おのづと威に打たれて近寄れまい、こいつ仕舞うた、も少し差控へて、わざと弱々しう向へば宜かつたに、あんまり力足を踏み過ぎて折角の敵手を回しました、敵手がないとすれば、まさか一人喧嘩も出来ンが、さりとては惜しいわい、腕が鳴るわい、かういふ時に白刃を提げた半狂氣で、警察も巡查も

持て餘した亂暴者が七八人も一時に此長屋へ押し込で來居らんかなア」  
半助老爺、おもはず鳶鼻を疊み上げて顔中の高笑ひ、

「は、は、は、乃公も今年五十三だ、若エ時から随分、生命知らずに火の粉の雨も血の雨も潜ッて來たが、まだ五斗俵を手鞠に取ッた上方野郎に出ツ會はさねエ、どんな味がするか、ちよいと一口、舐めてやらう、動かす其處に居ろツ」

菊池の千本鎗に似たる串削りの磨ぎ出し庖丁、ぴかりと破障子の影より光るや否、贅六、はツと驚いて入口に立掛けし三味線を取りながら、そろく遁腰の體を、どうせ斯ういふ奴と待ち受けし瘡毒お六の聲、

「親方、早く遣ッ付けないと其奴、遁け出すよ、こゝから妾は火鉢の灰を、ぶツかけてやるからね」

「は、は、は、お六さん、遁けりやア遁してやるさ、實ア野郎、どうするかと試しに威嚇

かして見たのよ」

贅六、やしく安心しながら、三味線を抱へしまゝの減らず口、

「本氣で來居れば面白いが、ぢやらくと、あほらしい、嘘や試して喧嘩が出来るかい、そんな奴に暇を潰さうより、今日は氣を變へて此まゝ晝の流しに出てやらう、毎夜々々聲ばかり聞かして女子どもに、また顔も見せてやらんと罪ぢやわい、はは、は、」

最初より敵の勢ひと地の利を考へて自己が塹を飛び出し、いざとならば商賣道具を荷いで遁け出す覺悟の贅六、されど喧嘩は案外の無事に治りて、今更ら三味線を抱へたまゝ元の巢にも這入れず、これ幸ひの晝稼ぎとは、どこまでも損をせず押の強い口の減らぬ奴なり、

「いや鳶の阿爺、悪うは取らんぜ、おかけで夜だけの家業も今日は白晝の流しに出ま







「嫌なら嫌で、およしなさいよ、無理に戴かうとは、いひませんから、まづ總體ひツくるめて十五錢ですな」

「十五錢、いや屑屋、十五錢とは單に、十五錢の意味かね」

「何處だつて十五錢は十五錢ですよ、十錢銀貨一枚と白銅一枚ですよ、これでも實ア、のこく、厩橋から連れ込まれて、あまり有難くないンですが、折角こゝまで來たもンですからな」

「おい屑屋、雑誌や本箱は兎も角、この夜着は着て寢られるンだぜ、現在この乃公が毎晩、着て寢たンだぜ」

「そりやア、貴君の夜着ですから貴君ア着て寢られませうよ、しかし世間の人間は其まゝぢやア着て寢ませんぜ、たゞ襪褌と見ての價ですよ、だが貴君の身に纏つてるものア割合に破れちやア居ませんね、まさか着物は可不ますまいが、羽織は如何で

す、それなら三十錢に戴きますぜ」

そろく丸裸に剥き取る價を付けられて、富田剛太郎ますく感慨に迫りし體、されど屑屋を敵手に喧嘩も出來ず、まして脊に腹は替へられぬ場合、二日越の飢渴に猶更ら堪へ難き無念の涙を絞つて、拳を握りながら苦しげに叫び出しぬ、

「屑屋、賣つて仕舞はう」

「十五錢ですぜ」

「いや二十錢に買へ」

「ぢやアよろしい、これも何かの縁だ、五錢は人助けだと思つて、二十錢に買ひませう」

死して百年の後世、いかなる天下の知己を得るか知らねど、生きて現在の色情學者、鐵砲策を脊負ひし屑屋のために踏み倒されて、今更ら浮世の風に骨を刺さるゝ心地、

無量の感慨うた、胸に迫りぬ、

それも其筈なり財産全部を擧げて十五錢、人助けといふ無禮の言下に五錢を加へられて、やうく二十錢銀貨一枚、それさへ嫌なら止せといふ面相、恩に着せて出で行く屑屋の後姿を見送りて、ますく一種の感に打たれぬ、

いかに芋の藪を嚙ればとて、二十錢銀貨一枚は半月の露命を繋ぎ難く、たとひ身に纏ふ衣類を脱いで丸裸になればとて、もはや一月の生命は覺束なし、

されど夜着を賣りて古毛布を殘せしは、本人まだ急に飢死もせぬ料簡、まして雜誌は賣れど七八冊の書物を惜しんで小脇に抱へし心中、これが此奴の病的、やはり例の一局を捨て兼ねて相變らず吾人人類の生物以來を振り廻す覺悟なり、折しも串削りの半助老爺、ぬつと馬面の鳶鼻を突き出しぬ、

「先刻から見て居たが、屑屋を呼んで來て雜物を叩き賣った工合ぢやア汝さん、どツ

かへ出なさるやうだね、實ア肌が合はねエから自然、あまり平生は親しくもしなかつたが、さて出るとなりやア妙なモンで、ちよいと止めたくなるよ、是非とも出るに極めたかね」

「聊か期するところあつて已むを得ず、急に他へ轉ずる」

「まさか、今朝お六さんにやられた故でも、なからうねエ」

「は、は、もとより齒牙にかけて居らないさ、第一また他に動かさるゝ僕でない、別問題だ」

「それなら汝さん、かう揃つて長屋中の居ねエ時に出なくツても宜からう、それぐ挨拶の一文句もして出なせエよ、すりやア人情また幾何づつか錢別も出せるといふモンだね」

「や、僕の都合上、自分の物品を賣つて屑屋から相當の代價は取るが、他日の志望あ

るもの、この長屋の人間から刃りに餞別は受けられねエよ」

「何、この長屋の人間から刃りに餞別は受けられねエ、わざ／＼誰が受けてくれと

頼んだい、ふざけた事をいふ南瓜野郎だ、出る奴に文句ア入らねエが、おい、奴、

今の屑屋ア相當の價で買ったと思ってるか、うか／＼すりやア身に纏ってる羽織ま

で引ッ剥がれさうな馬鹿待遇にされてよ、おまけに人間の屑ア買はねエと念を押さ

れた奴が、人の親切に對ッて何といふ生意氣な御詫を吐きやアがる、可愛氣のねエ

奴だぜ、は、は、お六さん、いよく／＼豆殻が風に吹かれて、どツかへ散るさうだ」

瘡毒お六また聲に應じて首を差出しぬ、

「おや、さうかね、豆殻さん、全體まア何處へ引ッ越すんだよ、餘計な世話だが、行

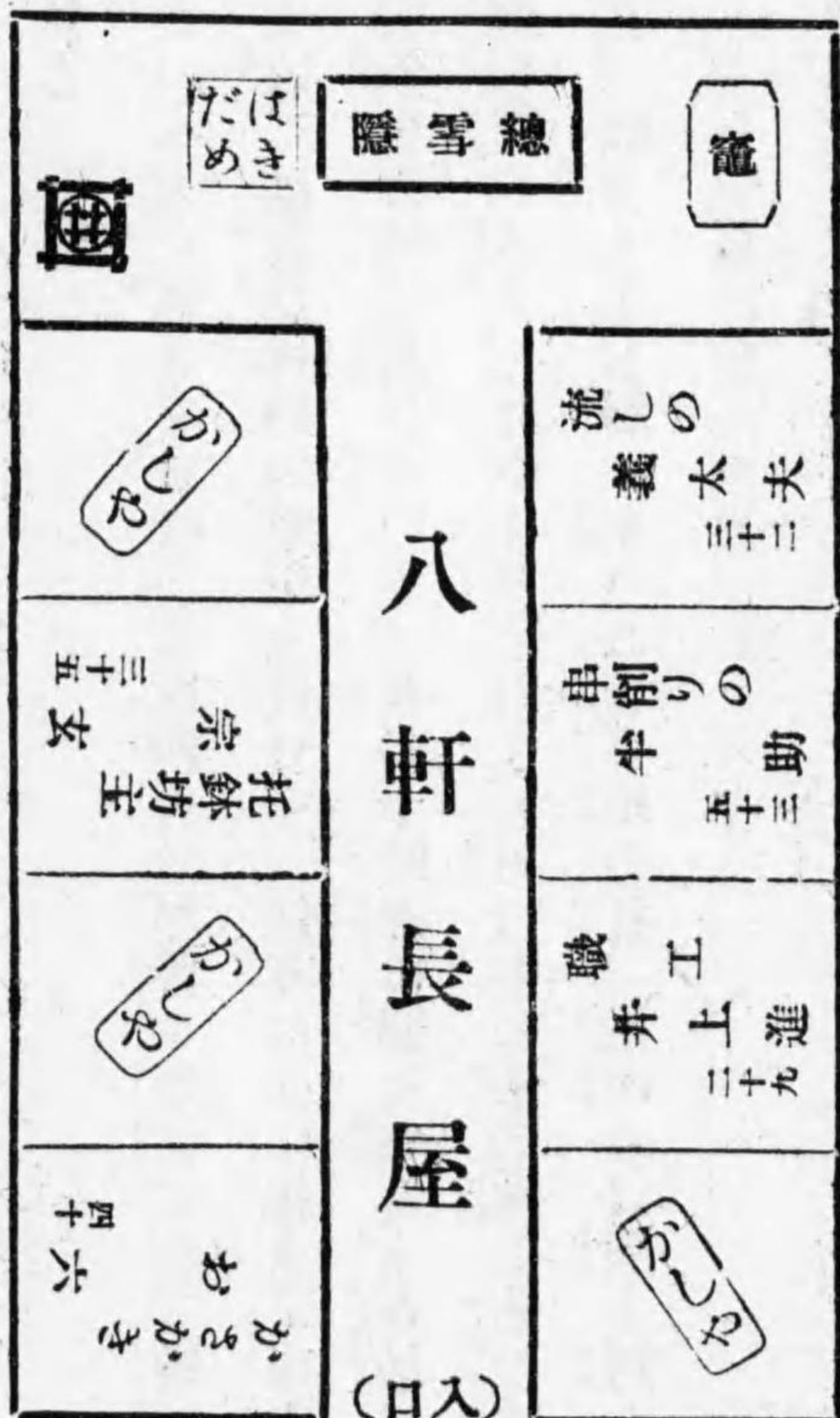
く先に雨露を凌ぐ目的はあるのかね、そりやア兎も角、例の色情沙汰に付いて屁理

窟を並べる事だけは一切、およしよ、わるい事は言はない、汝さんの身の爲だ、あ

の病的がある以上、いくら本を讀んでも考へても、人間の仲間入は出来ないからね、今朝もいふ通り今のうち氣を持ち直して、犬殺しの稽古でもするさ」

八軒長屋

(口入)



そも／＼八軒長屋の開闢以來、あの大浦卓三と熊さん夫婦の外、いづれ満足に譽めら